

江戸城門番役の機能と情報管理

岩淵令治

Function and Information Management of Edo Castle Gatekeepers

IWABUCHI Reiji

- ① 内曲輪門の機能
- ② 門番役の文書作成・管理と運用

【論文要旨】

本稿では、江戸城門番のうち、大名に江戸での勤役として課された内曲輪門・大手三門をとりあげ、以下の二点を明らかにした。

第一に、江戸城の門番役については、国内外の戦争なき『平和』の世にあつて、防衛という機能の実質的な喪失が強調され、本格的な検討は行われてこなかった。そこで、とくに都市空間との接点となる内曲輪門について、個別藩（江戸藩）の事例をとりあげ、その機能を検討した。その結果、空間の管理や祭礼、夜間の通行者といった局面で町人地と接する都市の番としての性格を色濃く持ったこと、また夜間の通行の制限、儀礼の演出や武家の秩序の確認などの機能を果たしたことを明らかにした。

第二に、頻繁な交代の中で勤務を遂行していく基盤となった情報管理について、大手三門も含めて、検討した。とくに注目したいのは、門番役の引き継ぎの際に利用さ

れた「申送」・「申合」、基本台帳としての置帳が、担当藩によって作成され、幕府は関与しなかった点である。門番役について幕府は基本法を作成したうえで、その都度指示を与えたが、その運用や先例の蓄積は各藩に依存していた。こうした結果、内分のマニュアルの成立や、門ごとや家ごとの判断の差異も生じることとなった。このように、江戸城の門番役は、各担当藩の自律性によって遂行され、担当藩の情報共有によって一定度の規律を保ちつつ、家ごとの判断基準の差異もはらんだ形で運用されていったのであった。なお、幕府の組織体の文書作成・管理についてはまだ事例蓄積の段階にある。今回の分析によって、役所が存在し、かつ担当者が頻繁に変わるといふ、従来とは異なる条件での事例を提示しえたと考ええる。

【キーワード】江戸城門番役、都市の番、儀礼、情報管理、藩の自律性

はじめに

江戸城の門番役については、国内外の戦争なき¹平和²の世にあつて、防衛という機能の実質的な喪失が強調されてきた。しかし、筆者は江戸城門番の機能と実態について、総括的に検討した上で、非常時の江戸防衛体制の中での位置づけや、江戸城の防衛上最重要であつた大手三門³を検討し、平時の番、都市の番、そして儀礼の演出装置として重要な役割を果たしたことを明らかにしてきた。本稿では、以下の二つの課題にとりくみたい。

第一に、都市空間との接点となる内曲輪門については、個別の検討が十分に検討が行えていない。そこで本稿では、あらためて一つの藩に即しながら内曲輪門の機能を明らかにする。具体的には、一七世紀の史料も含めて門番関係の史料が残存する稀少な例として八戸藩（二万石）の事例をとりあげたい。

第二に、複数の藩によって交代で担われていた門番役の遂行において、情報の蓄積・共有が重要だつた点を解明したい。すでに、幕府の組織体の文書作成・管理については、大友一雄氏による寺社奉行と奏者番の検討があるが、町・村に比して、まだ事例蓄積の段階にある。⁴とくに門番役の場合、寺社奉行・奏者番とは異なつて役所が固定的である反面、頻繁な交代によって運用されるという特徴があり、新たな事例を提示する。さらに本稿では、大手三門・内曲輪門の双方について、引継文書の内容と、基本台帳「置帳」の成立と展開を検討したうえで、門番の機能や運用との関係にも言及したい。

①内曲輪門の機能

1 門番役の概要

江戸城の門番には、幕府の番衆が担当する城内のものと、大名・寄合以上の旗本が担当した城外のもの（図1・表1）があつた。城外の門番は、二家が一〇日交代で勤めた。門は枳形の形をとり、外門（冠木門）と内門（櫓門）の二重の門があつた（後掲図4）。門番は門の開閉と追加者の確認、さらに門内外の掃除や空間の管理、そして將軍や外交使節が入りする儀礼の場の維持を担当した。幕府の所管は当初は留守居、正徳三（一七一三）年四月以降は大名担当の門が老中、寄合担当の門が留守居となつた。日常の職務の指示については、当番の目付と配下の徒目付・小人目付が行つた。

城外の門は、その重要度から、A大手三門（27大手門・30内桜田門・32西丸大手門）とB内曲輪一五門（13・26・29）・C外曲輪一一門（1・6・8・12）の三つに分けられる。これらの門では、詰める人数や武器（表1）、職務内容が異なつた。

最も重要視されたのが、A大手三門である。門番には自身の譜代大名が任じられた。大手三門は、江戸城に登城する大名などが、供の大半を門外に残さなければならない最終ラインの門で、一般の者の通過は許されなかつた。また、門はすべて卯刻より酉刻（六時～一八時）しか開かれなかつた。

B内曲輪門では、幕閣の屋敷のある西丸下ほか北の丸の出入りにかかわる門（23外桜田門・25馬場先門・26和田倉門・29竹橋門）に譜代大名が、大名小路や大手前より外側の門に外様大名が配置された。またC外曲輪門は、10幸橋門以外は旗本の寄合が任じられた。開門時間は、Bは外門は一日中、内門が卯刻より酉刻（六時～一八時）でくくり戸が子刻（〇時）まで、Cは外門・内門とも一日中であつた。また、酉刻より卯刻（一八時～六時）まで女性の通過者の手形改を行つた。

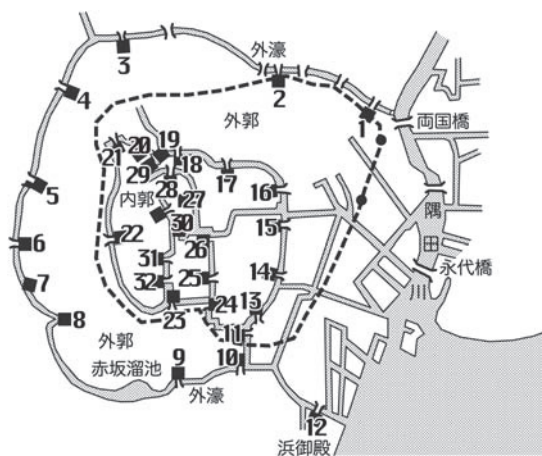


図1 江戸城主要城門
(点線は常盤橋門番が対象とする出火範囲である〈後述〉)

表1 江戸城門番の格と人数

番号	門	格	人数(人)				
			給人	侍	足輕	中間	合計
1	浅草橋	旗本 5000～万石					
2	筋追福	旗本 5000～万石					
3	小石川	旗本 3000～万石					
4	牛込	旗本 3000～万石					
5	市谷	旗本 3000～万石					
6	四谷	旗本 3000～万石					
7	喰違	二丸留守居					
8	赤坂	旗本 3000～万石					
9	虎	旗本 5000～万石					
10	幸橋	外様 1万石余	4	2	25	20	51
11	山下	旗本 3000～万石					
12	浜大手	旗本 5000～万石					
13	数寄屋橋	旗本 5000～万石	4	2	25	20	51
14	鍛冶橋	外様 1万石余	4	2	25	20	51
15	呉服橋	外様 2万石余	4	2	25	20	51
16	常盤橋	外様 3万石以上	4	3	27	23	57
17	神田橋	外様 7万石 (国持分家は3万石以下)	5	3	35	27	70
18	一橋	譜代 2万石以下	4	2	25	20	51
19	雉子橋	旗本 5000～万石					
20	清水	旗本 5000～万石					
21	田安	譜代 1万石	4	2	25	20	51
22	半蔵	譜代 1万石余	4	3	27	23	57
23	外桜田	譜代 3～5万石 (外様に準ずる家)					
24	日比谷	外様 1万石余	4	2	25	20	51
25	馬場先	譜代 2～3万石	4	2	25	20	51
26	和田倉	譜代 2～3万石	4	3	27	23	57
27	大手	譜代 10万石	20	5	100	50	175
28	平河	先手組与力同心					
29	竹橋	譜代 1万石余	4	2	25	20	51
30	内桜田	譜代 6～7万石	10	5	50	50	115
31	坂下						
32	西丸大手	譜代 6～10万石	10	5	50	50	115

*格は天保8・10年(1837・39)刊『殿居囊』。
人数は「教令類纂」所収の正徳3年(1713)の規定による

2 八戸藩の江戸勤役

まず、八戸藩の江戸での勤役を概観しておきたい。参府大名は、江戸藩邸に滞在し、節句や毎月の定例日（月並登城）に江戸城に登城して將軍への忠誠を示したが、さらに具体的な職務（勤役）が課せられることがあった。八戸藩の場合、確認できる勤役は八五回である。最多は江戸城の門番役で四四回、ついで公家の饗応役一三回、江戸城や幕府施設の防火を目的とした火消役七回、犯罪人の預り六回、駿府加番三回、側役三回、京都の皇居の警備などその他八回となっている（表2）。政治的には二代藩主直政の側役が注目されるが、回数が多いのはむしろ軍事的な勤めであった。また、隣接した外様大名津軽藩の勤役のうち八戸藩立藩後のものと比較すると、門番役（神田橋門）・火消役（本所）と勅使饗応役は共通するものの、蝦夷地警備のほか川除や寺院等の手伝普請、幕領検地などが賦課されていない。八戸藩の場合、門番を主として特化した勤役が賦課されていた点が特徴といえよう。

公家の饗応役とは、天皇・上皇・女院などの使者（勅使・院使・女院使など）として朝廷から派遣された公家を警護・接待するもので、江戸の滞在先である伝奏屋敷に藩主ほか藩士が詰め、外出や江戸城への案内も行った。一〇七万石ほどの外様大名の中から、各使に対して一家、さらに控として二家程度が命じられ、これらに儀礼に精通した旗本（高家）が指南役に付いた。⁶⁾周知の通り、赤穂事件の発端は、饗応役を命じられた赤穂藩主浅野長矩と指南役であった高家吉良上野介との刃傷沙汰である。八戸藩の饗応役は、一三回のうち一〇回が幕府の新年の挨拶に対する三〇四月の使者（年頭勅使）、三回が將軍法事の使者であった。ただし、五回は控の勤めであった（表2※印）。また、勤務日数は三週間程度であるが、経費は進物や高家への礼金なども含めると高額になった。たとえば、寛延元（一七四八）年の勤務前に、前年に勤めた足守藩に問い合

表2 八戸藩の江戸勤役一覧

（おもに「目付所日記」〈八戸南部家〉より作成）

勤 役	回数	内 訳
江戸城門番	44	鍛冶橋門 15 回、呉服橋門 9 回、常盤橋門 9 回、日比谷門 7 回、数寄屋橋門 2 回、西丸馬場先門 1 回、幸橋門 1 回、
饗応役 （※は控役）	13	年頭（延宝 6（1678）年、元禄 11（1698）年・仙洞使、※正徳 2（1712）年、正徳 4（1714）年・院使、※享保 14（1729）年、寛延元（1748）年・大宮使、※宝暦 11（1761）年、寛政 9（1797）年・院使、※文化 4（1807）年、嘉永 2（1849）年・女御入内の勅使）、法会（天和元（1681）年の秀忠法会・勅使、宝永 6（1709）年の綱吉法会・中宮使、※正徳 3（1713）年 10 月の家宣法会）
火消役	7	本所火消 4 回（寛文 10（1670）年・延宝 8（1680）年・明和 2（1765）年・明和 5 年）、本所米倉火の番（明和 3 年）、浅草米蔵火消（貞享元（1684）年）、方角火消（元禄 13（1700）年）
犯罪人の預り	6	佐野市郎左衛門（延宝 2（1674）年）、戸川主水（延宝 9（1681）年、国元へ移送）、青山虎之助（貞享元（1684）年）、伊東淡路守（御小姓衆 800 石 貞享 3（1686）年）、弓場弾右衛門（正徳 2（1712）年、国元へ移送）、伊奈右近（寛政 4（1792）年）
駿府加番	3	延享元（1744）年 5 月～9 月（藩主が病のため免除）、延享 3（1746）年 5 月～7 年 7 月、文政 11（1828）年 5 月～9 月（帰国）
側役	3	詰衆（貞享 4（1687）年）、側衆（元禄元年）、側用人（元禄 13（1700）年）
その他	9	聖護院門跡参向で増上寺裏門より庫裏まで警備（貞享 4 年）、朝鮮人來朝で遠州舞坂まで鞍皆具・中馬送御用 2 回（延享 4（1747）年、宝暦 12（1762）年）、禁裏御所方用（安政 2（1855）年）、將軍上野往詣の豫参（安政 5 年）、江戸城本丸御殿再建に関する上納金（万延元（1860）年）、日光御宮御霊屋ほか修復（元治元（1864）年）、京都表警衛（元治元年 すぐに取り消し）、毛利左京謹慎につき居屋敷付近取締家来見廻り（元治元年）
合 計	85	

わせたところ、饗応役の経費が二四〇〇両だったとの回答があり、急遽二〇〇両の御用金を領内に課すよう、指示している。駿府加番は、幕府が管理した駿府城について、城外を守る役職である。

駿府城代のもと、城内を守る幕臣の定番（常駐）・在番（二年交替、寛政二（一七九〇）年からは常駐の勤番）とともに任にあたった。当初は二名、のち三名となり、筆頭の一加番は一八世紀以降は主に一万石格の外様大名が勤めた。毎月、幕府より高一〇〇〇石につき四〇石扶持が支給されたため、財政上は藩にとって魅力的な役であった。勤務は一年交替（五月任命、翌年九月満期）で、祭礼の際の警備、朝鮮通信使の通行時や出火の際の警備のほか、久能山東照宮への参詣などの儀礼的な任務を果たした。

門番役については、B内曲輪門のうち日本橋・京橋の町地と隣接した門が中心で（鍛冶橋門一五回、景服橋門九回、常盤橋門九回、日24 比谷門七回、13数寄屋橋門二回、25西丸馬場先門一回）外曲輪門の0幸橋門が一回となっている。

3 職務の内容

（職務の概要）

以下、おもに天保期の6常盤橋門番の記録類から、職務の内容を検討したい。

天保一三 一八四二年、八戸藩は五月一日より、翌年六月五日に帰国を命じられて丹波柏原藩に引き継ぐまで、常盤橋門番をつとめた。ともに門番をつとめた藩（相番）は最初は近江大溝藩で、同藩が一月より大坂加番となつてからは宇吉藩となった。門番の勤務は、基本的には一〇日勤めて一日目の四時（一〇時ごろ）に交代した。八戸藩がつとめたのは合計でおよそ二〇〇日となっている。

図2は常盤橋門を左斜めから撮った写真、図3は門の手前の外堀にかかる常盤橋を右斜めから撮った写真である。図4は門番の平面図である。堀をはさんだ門の正面の「本町」は、江戸の中心的な町である本町一丁目（現日本銀行付近）であった。橋の手前に外張番所、橋を渡って堀を越えると冠木門がある。門を潜ると枳形となり、中には枳形番所（内張番所）が、さらに本門を抜けると右に大番所が置かれた。大番所は、藩士の詰所であり、ここから交代で見廻りや番所詰に出た。門を入ると右には福井藩の上屋敷（松平越前守）正面から左側には長らく北町奉行所が置かれていた⁹。

では、この際の勤務中の記録と、勤務開始直前に相番の近江大溝藩と取り決めた職務の細則から、門番の職務をみていこう。

五月一日に、相番大溝藩より受持場所と門鍵四つ・海老鍵大小五つ・銅物入の箱一つを受け取り、またさしあたって道具を前任の宇土藩から借りて八戸藩は門番勤務を開始した。表は規定の武器・数である。

図2 常盤橋門の枳形と櫓
東京国立博物館蔵「旧江戸城写真帖」

図3 常盤橋御門 明治初年 松戸
市戸定歴史館蔵「東京常盤橋御門」

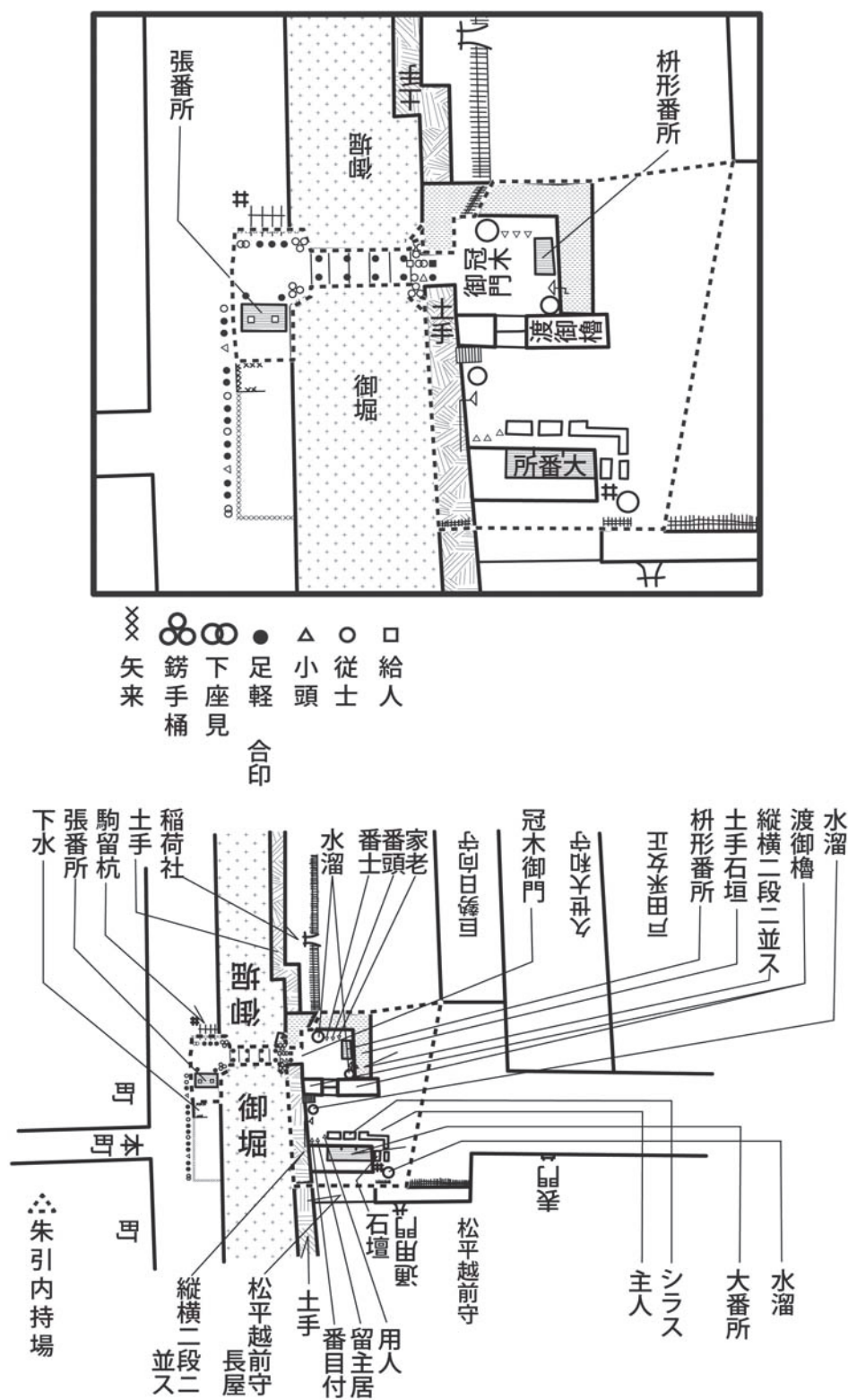


図 4 常盤橋門番

「山王御祭礼ニ付外固絵図面写」(八戸南部家)より作成。
上図の記号は、將軍御成の際の藩主・藩士の平伏場所を示す。

表3 常盤橋門番の武器と詰人数

武器	数	格	人数
鉄砲	10挺	給人	10人（5人ずつ詰）
弓	5張	侍	4人（2人ずつ詰）
長柄	10本	足軽	27人（小頭2人）
持筒	2挺	中間	20人+小頭1人
持弓	2張		
合計			62人

「常盤橋御門被仰渡便覧」(遠山家文書)より作成

計六二人のうち、侍身分は給人・侍の一人にすぎず、残りは足軽・中間であった。天保の実際の勤めでは、藩の担当は、番頭を筆頭に番目付一人・番士四人・徒目付一人・用番一人・膝代り一人・藩の組小頭一人・大部屋小頭一人・茶番四人の組が二隊〔「老番詰」〔「式番詰」〕〕で、番所に五日間泊まり込み、六日目に隊が交代した。藩士たちの指示で番にたった多くの中間・足軽は、江戸市中の請負人二名〔高橋〔播磨屋〕藤兵衛・和田市五郎〕から雇用された者たちである。行事などのつとめで藩から褒美を請けた者は、請負人二名のほか、計七四人〔雇小頭二人・足軽三十六人・足軽世話役一人・小人小頭一人・小人世話役五人・下茶番一人・小人二十八人〕にのぼっている。

門番の職務は、平時には、日常のものとして、門の開閉・通過者の改め・担当する空間〔持場〕の管理、非日常のものとして、儀礼・祭礼・火事、そしてこの年には将軍が不在となる日光社参があった。

(2) 門の開閉と通過者の改め

門の開閉は、面番が詰めた上で毎朝明六時（六時ごろ）に開き、暮六時（一八時ごろ）の御太鼓の時に閉め、夜間は大番所・枅形番所・外張番所とも戸・障子を外して、番士以下がそれぞれに詰めた。表4は実際の配置である。

確認を行う通過者は、以下の八つのケースであった。まず①一八時から六時の間に通過する女性である。乳児も例外ではなく、駕籠に乗って

表4 足軽以上の基本配置

場所	格・人数
一之間	番士4人〈数年来5人から4人に減少 夜は1人〉
二之間	徒士2人〈夜は1人〉
幕下	足軽4人（内1人小頭）
御門下	足軽3人
枅形	足軽2人
外張	足軽4人（内1人下座見）

「番人勤方之覚」(「常盤橋御門勤方覚」遠山家文書)

いる者についても人数を改め、女手形との照合を行った。②開門時間中（六時から一八時）の車・駕籠についても、材木・竹・石や植木を積んだ車・駕籠は連絡〔「断」〕が無ければ通過禁止であった。また重たい荷物を積んだ「地車」は一切通過禁止であった。③武家も乗馬の通過は禁止で、たとえ荷物を両側につけた馬の背に乗る「乗懸馬」であっても後ろに「刀箱」を持った家来がいなければ、馬から下りることを命じられた。また、④棺持人は「穢」があるので小屏より手形を確認して通し、飯門を用い、通過後は打水で浄めることとされた。⑤荷物については、竹木・植木類、風呂敷を掛けた進物類以外は手形の確認、⑥鉄砲、御預けの御道具類は其向々〃支配や預け先の連絡〔「断」〕、⑦手錠をした囚人は支配からの連絡〔「預」〕か同心の付き添いが必要であった。⑧勸進者や巡礼者、髪結や物乞いは基本的に通行禁止であった。

天保一三年一月晦日には、閉門時間の暮六時（一八時）を過ぎてから、門外より内へ女性一人が駆け通った。門下番人の者が同行の男性とともに取り押さえて身元を尋ねたところ、大番所の裏手に上屋敷があった福井藩の持筒組大平文次郎と名乗った。そこで、大番所の三ノ間に身柄を移し、福井藩に確認したところ、同藩留守居が手付を派遣し、「近頃出府仕候者二面甚不按内故不始末之致方、御内聞御取斗被下度旨」と幕府には内分の処置を頼んできたため、女性は通切手をとった上で通し、文次郎は先方の留守居手付に引き渡している。

表5 鍛冶橋門の通行状況

A 元禄 15 (1702) 年 11/21 ~ 12/2 の夜間の女性・日中の病人人馬の通行

月日	時刻	人数	申請者／出発地→／→行き先
1122	*夜五時	女 1 人	松前伊豆守 (※南町奉行)
1122	酉下刻	女 1 人	三浦壱岐守
1122	酉下刻	女乗物 2 挺・陸立女 4 人	松平土佐守／ →松平土佐守上屋敷
1122	酉下刻	女 2 人 (うち乗物 1 挺)	酒井左衛門尉
1122	*酉下刻	女 1 人	松前伊豆守
1122	子上刻	女 1 人	三浦壱岐守
1123	*六半時	女 1 人	松前伊豆守
1123	六半時	女 1 人	丹羽遠江守
1123	明七時	女 1 人	★豊町伊兵衛／ →(保田) 越前守 (※北町奉行) (伊兵衛店甚五兵衛母)
1124	七半時	女 1 人	★新右衛門町家主五郎兵衛／ →松前伊豆守
1124	*暮六時	女 1 人	松前伊豆守
1124	*暮六時過	女 1 人	松前伊豆守
1124	*暮五時過	女 1 人	松前伊豆守
1124	五半	女駕籠乗物 1 挺・下女 1 人	織田越前守
1125	明七時	女 1 人	★宇田川町家主清左衛門／ →評定所
1125	酉下刻	女上下 4 人	阿部豊後守／ →豊後守上屋敷
1126	明七半	女 2 人	★三田同朋町家主三郎兵衛／ →保田越前守番所
1126	明七半	女 1 人	★芝西応寺町家主庄右衛門／ →伊豆守番所
1126	明六前	女 1 人	★豊町伊兵衛／ →(保田) 越前守 (伊兵衛店甚五兵衛母)
1126	酉下刻	女乗物 6 挺	酒井靱負督／ 酒井靱負督居屋敷→土井周防守居屋敷
1126	酉下刻	女乗物 2 挺・歩行女 3 人	酒井靱負督／ 酒井靱負督居屋敷→土井周防守居屋敷
1126	夜五時	女 2 人	中条河内守
1126	*夜五半	女 1 人	松前伊豆守
1127	暮六過	女 2 人	松平下総守
1127	六半時	女 2 人	★浅草瓦町久兵衛店／ →松前伊豆守様
1127	五過	女上下 9 人 (うち乗り物 2 挺)	阿部豊後守／ →豊後守上屋敷
1128	明七時	女 1 人	★芝如来寺門前家持太兵衛／ →伊豆守様御番所
1128	七過	女 1 人	★豊町伊兵衛／ →(保田) 越前守 (伊兵衛店甚五兵衛母)
1128	*暮六過	女 1 人	松前伊豆守
1128	—	女中 1 人	松平備前守
1202	*明六時	女 1 人	★並木町名主伊兵衛・同町七郎右衛門／ →松前伊豆守
1202	*酉下刻	女 1 人	★丹羽遠江守／丹羽遠江守様御番所→松前伊豆守様御番所
1121	昼八時	女乗物 1 挺 (病死の女 1 人)	松平主計頭 →浅草新寺町常林寺
1121	夜五ツ	病死之者 1 人	松平和泉守
1121	酉下刻	損馬 1 疋	松平備前守
1124	朝四時	病死女 1 人	堀大和守
1124	暮六時	病死之者 1 人	松平伊予守 →寺
1124	五時	男死人 1 人 (乗物 1 挺)	松平讃岐守
1127	四時	男死人 1 人	松平讃岐守
1128	七時	病死之者 1 人	牧野備前守
1201	四時	□死馬 1 疋	松平備前守

B 正徳元 (1711) 年 7/14 ~ 7/22 の日中の荷物・囚人の通行

日付	時刻	人数	居所 (申請者)／出発地→／→行き先
714		材木挽木板積申候大八車 1 輛	間部越前守 出入
716	六時過	大八車 10 輛 (本丸御用)	小普請方平左衛門 今日中往来
717	五時前	大八車 10 輛 (本丸御用)	小普請方杉村平左衛門 今日中往来
717	五時前	大八車 1 輛 (材木積)	丹羽遠江守 →丹羽遠江守番所迄 (※南町奉行)
718	朝六半時	覆道具車 2 輛	当番酒井備後守 →馬場先門 (当番酒井備後守) 迄 往帰とも
718		大八車 5 輛 (本丸御用)	小普請方杉村平左衛門 今日中往来
718	五時過	大八車 1 輛	間部越前守 出入
718	八時過	大三寸木 2 本	阿部豊後守
718	五時前	大八車 3 輛	間部越前守 今日中出入
720	*五時過	囚人 1 人	六郷領久田川原村名主源兵衛 →丹羽遠江守
720	五時過	大八車 1 輛	丹羽遠江守
720		大八車 1 輛	丹羽遠江守 →門外
720		大八車 5 輛 (本丸御用)	小普請方杉村平左衛門 今日中上下
720	四ツ過	大八車 1 輛	間部越前守 今日中出入
720		大八車 2 輛	間部越前守 今日中出入
720	*六時過	縄付 2 人	堀大和守 →堀大和守下屋敷
721	[]	大八車 1 輛	松平出羽守 河岸→松平出羽守上屋敷
722	六半時	大八車 6 輛	間部越前守 出入
722	朝五時過	大八車 5 輛	間部越前守 出入
722	*五半時過	手錠之者 2 人	芝口三丁目太郎左衛門 →門外へ
722	四ツ半	大八車 2 輛	間部越前守 出入

C 元禄 15 年の「出入改手形」

区分	期間	件数
女中手形	4/19 ~ 29	28
	5/9 ~ 19	32
	5/29 ~ 6/10	35
	6/20 ~ 晦日	35
	7/10 ~ 20	43
	8/1 ~ 11	21
	8/21 ~ 29	18
	閏 8/11 ~ 20	27
	9/2 ~ 10	15
	9/22 ~ 10/3	26
	10/13 ~ 22	23
	11/1 ~ 11	26
	11/21 ~ 晦日	22
	12/12 ~ 22	35
	140 日の合計	386
	縄付 1 人	1
	普化僧 1 人	1
	病死手形	58
	140 日総計	446

A「鍛冶橋御門留帳 女通手形・死人通手形写」・B「鍛冶橋御門留帳」・C・「手形改之覚」(「留帳」五所収) (八戸南部家) より作成。

* = 手形ではなく「断」での申請。

★ = 「訴訟」。

C の病死手形 (「人馬病死」) の件数は 11・12 月分を欠いたもの。

また、四月三日には、閉門時間を過ぎた暮時過に、馬喰町家主吉左衛門店の平次郎妻が訪ねてきた。南町奉行所へ出頭した後、同行していた者とはぐれ、閉門してしまつたので何とか帰宅したい（「何卒御取扱を以帰宅仕度旨」と願ひ出たのである。そこで、本人の家に使番を派遣し、さっそく家主吉左衛門が通切手を作成して届けてきたので、門を通過させている。

天保一三（一四）年の常盤橋門の通過改の総数については記録がないため、例として表5Cには、14鍛冶橋門番勤番中に認めた通過者をあげた。元禄一五（一七〇二）年四月以降の一四〇日間の合計は四四六件で、①閉門時間帯の手形での女性の通過者は三八六件、⑦囚人（縄付）が一件、⑧普化僧が一件、④病死が五八件となっている。これらは基本的には、門内にある大名屋敷の関係者である。ただし、①については一月二一日より晦日の手形二二件中、行き先を見ると、早朝の町奉行所（松前伊豆守・保田越前守）への訴訟人が一件と目立つ。これは、当時、鍛冶橋門が南町奉行所に面していたためであろう。また断の通過が一〇件あるため、一〇日間の実数は三二件と女性の通行が多かったことがわかる。②・⑤車荷物については、正徳元（一七一）年七月一日より二二日まで一九件であった。このように内曲輪門には、通行や、車による荷物の搬入が頻繁にあったのである。

（3）空間の管理

門番の仕事は、門の開閉と出入の監視だけではなかった。図4でみたように、常盤橋門は外側で町、内側で武家屋敷に面していた。図では、町に面した道路、堀と武家屋敷に面した空間に朱線が引かれている。これは、施設や道路の管理、行き倒れ・病人・怪我人・酒酔人の介抱、捨子の養育、喧嘩の制止と身柄の拘束、放れ馬の拘束、落とし物などの処理を行う門番の担当区域（持場・掃除場）である。⁽¹⁶⁾ 門番は、町・武家屋

敷と分担して、都市の空間の管理を担ったのである。

天保の八戸藩の常盤橋門番の記録では、堀にかかる橋の両側（「鶴ノ首左右」）に落ちた犬など犬の死体の突き流し二件（五月二六日、一〇月二三日）、下陣縁立下への落犬二件（二月一八日）の処理が記されている。この際には、特別に「酒代」一五〇文、「突流・芥取捨大儀料」六〇〇文、「例の通り酒代」が小人に支払われていることから、人宿から雇用している小人に処理を命じたことがうかがえる。

また、一月二七日の近隣の福井藩邸からの出火直後には、女中を門から通過させるとともに（後述）、持場の土手際に置き去りにされていた書類（「奥向日記」）と銅火鉢一つを発見し保管した。そして、同藩の留守居と内談、確認のうえ、まず日記を返却した。火鉢は目印がないため、さらに確認を求め、翌日に引き渡している。

このほか、持場の草取や掃除、松の管理は恒常的に行われた。草取りは春夏は毎日、そのほかの時期は状況に応じて行われた。毎月末には松掛徒目付に松枯れがない旨を届け出た。⁽¹⁷⁾ 一〇日間の番の最終日には、雇小頭以下に毎回「定式酒代・御十日番中掃除大儀料」として二貫文が支払われている。とくに、將軍の外出（御成）や諸大名の登城などの時には徹底的に行われた。このほか、三月二七日には、持場内の地草・石垣通の草がとくに伸びたため、小人らに取らせ、酒代として一一〇〇文（地草取捨料六〇〇文・石垣草取捨料五〇〇文）を渡している。また、二月二二日には六半時頃より四時（五時から一〇時ごろ）まで雪が二寸ほど降った。幕府の徒目付・小人目付の見廻り後、筵（上筵一〇枚・下筵二〇枚）を購入し、すぐに雇小頭に除雪を命じ、大儀料として金一分二朱を渡している。

常盤橋門番勤務中の文化元（一八〇四）年一月一八日には、相番の足守藩の勤務時に、枳形で三〇才ぐらいの男の行き倒れがあった。様子を尋ねたところ、男は神田相生町善次郎店万吉で、町内で口論して少

表 6 晒場所一覧

場 所	晒 場 所
東(西丸カ)大手門	常盤橋外
内桜田より和田倉門迄	呉服橋外
馬場先門	鍛冶橋外
呉服橋内・大手迄	五郎兵衛町
神田橋外明キ地	三河町
内桜田門より水野肥前守屋敷前より日比谷迄之内	山下門外
半蔵門堀内	麴町
田安門・雉子橋門・清水門・竹橋門・一橋門の五カ所持場	飯田町

(享和 3 (1803) 年写「所々御門取計控」〔森本家文書〕より作成)

事件に関連した特殊例の可能性もあるが、町人に関する内分の処理が問題視されたわけである。

こうした空間の管理をめぐっては、隣接する武家屋敷や町との連携をはからなければならないことも少なくなかった。また晒については、門によって指定の場所があり(表 6)、指定場所の町との良好な関係も必須であった。八戸藩が常盤橋門番勤務中の享保一九(一七三四)年七月一日夜五時には、枡形の中で四〇才位の男性の行き倒れがあった。番所脇に収容し、長崎屋平左衛門を頼んで石町四丁目の町医渡辺良庵にも見て貰ったが蘇生しなかった。このため、常盤橋より南の一石橋へ四〇間

し疵を負い、町奉行所へ行くこうと駆けて来て、つまづいて倒れたという。大番所へ引き入れ、町役人を呼んだところ身元の確認はとれた。そして、町役人が「内分」で身柄を引き渡してほしいと願ったので、門番詰の役人は證文をとって身柄を返した。しかし、翌年六月に北町奉行は責任者の番人と徒目付を呼び出した。そして閏八月には、疵の手当をして藩の判断を得るべきところを軽傷を理由に内済で済ませたとの理由で、番人と徒目付の一時押込を足守藩に命じている。⁽¹⁸⁾何らかの

ほど堀端に引き出して幕府小人目付の検使を受け、同所の両替町河岸で三日晒し、引き取り手がなかったため、麻布一本松善福寺地中善光寺へ引き渡し、両替町の名主・町代にも報告している。⁽¹⁹⁾また、八戸藩の記録に掲載されている享保二〇(一七三五)年の鍛冶橋門番の先例では、淀藩邸(老中松平左近将監)前の堀に落ちて死亡した道心者について、幕府徒目付の検使と三日晒が済んだのち、「前格之由ニ^而当御門外町年寄共」へ寺への運搬と葬送を頼み、町を通じて寺から遺体の請取証文を受け取り、「町方之者諸入用」と名主五郎兵衛に挨拶金一〇〇疋を支払っている。その七日後にも引き取り手がなかった場合、遺骸は埋葬された。

また、捨子があった場合は早速保護し、番所では養育が困難という理由で以前から依頼している橋向の木葉屋に養育を頼んだ(兼御頼の御橋向木葉屋呼寄、御番所ニ^而養育難成候之間、其方ニ預置、乳付相負介抱候様相頼⁽²⁰⁾)。同様に日比谷門でも、宝永四(一七〇七)年の記録で保護した病犬の養育を「万屋五兵衛・箸屋伝助方」に頼むとしている。⁽²¹⁾

このため、鍛冶橋門番では、初回の出番と退番時には近接する大名屋敷の門番と辻番に挨拶するとともに、さきの「御橋向木葉屋河内屋助左衛門」に金一〇〇疋、橋向の髪結床二ヶ所に錢五〇疋を渡している。⁽²²⁾同様に、常盤橋門番を勤める場合も、初めての出番の際に、隣接する福井藩邸の門番・辻番と関宿藩(久世家)の門番、門の正面に拝領屋敷があった町年寄の奈良屋市右衛門、橋向の髪結所二軒に挨拶し、さきの長崎屋平左衛門という町人にも礼金や品を贈っている。15 呉服橋門番の最初の出番では、近接する大名屋敷の門番と辻番に挨拶し、さらに用事などを頼んでいるという理由で(「用事等相頼候二付」) 呉服町家主尾張屋喜左衛門に金一〇〇疋を、「御橋左右髪結床」にも鳥目五〇疋を渡している。⁽²³⁾内曲輪門では、近接する武家地・町人地と恒常的に関係を結ぶことが不可欠だったのである。

(4) 儀礼

こうした日常の勤めのほか、非日常の勤めがあった。その第一は、將軍や將軍家族の外出と帰城（御成）、諸大名などの江戸城登城（出仕）や外交使節の登城といった儀礼の際の番である。表7に示したのは、天保期の常盤橋門番がかかわった定式の年中行事である。まず御成は一九日、出仕は一七日となっている。御成については、こうした参詣（御成式御成）のほかに、さらに臨時のものとして、外出（遠御成）、門のそばを通過する外出（御見通御成）があった。では、天保期の「相番之覚」から実際の勤めをみてみよう。

参詣は、常盤橋門番をつとめた約二〇〇日のうち、増上寺とともに徳川將軍家の菩提寺の一つである寛永寺に七日（うち一日は天候不順で中止）、江戸城内の紅葉山東照宮に四日となっている。寛永寺の参詣は、五時（八時）に門を通過し、昼頃（午刻過・四半時・巳下刻）に門を通過して帰城するものである。前日には門や番所の掃除、草取や路面の修復が行われ、当日は早朝より藩主自らが側近（用人・留守居・医師・近習・茶道・右筆）らと番所に詰めた。そして、藩主をはじめ藩士が平伏して將軍を送り出し、その後も帰城まで番所に詰めた。図4には、門をくぐった左側に「主人平伏場 家老・用人・留守居・番頭」、門の正面および左に「給人」という記載がある。これは、將軍が門から出る際に藩主・藩士が平伏する場所を示している。一方、紅葉山東照宮の場合は、五時に出発、五時半に戻るものであったが、藩主の平伏や番所への詰めはなかった。

臨時の外出は、將軍が四日、前將軍家斉が三日であった。門を通過する予定が告げられるのは二日前で、やはり入念な掃除や道の普請が行われた。当日は、藩主と側近が門を出る時まで番所に詰め、通過時に平伏したのち、屋敷に戻った。帰城の際には家老が番所に詰めた。通行が夜間におよぶときは、照明（台提灯）を一六カ所に設置した。

門のそばを通過する外出は三日であった。呉服橋門通御・銭瓶橋通船

の時は一番払いより福井藩邸・鯖江藩邸前の持場境へ番目付を差し出して藩士を配置し、道の通行を止め、外張番所を撤収し、目立つ品を取り入れた。さらに夕刻の還御の場合は、夜に入ると面番所燭台・持場内に台提灯を出した。將軍から見えそうな場合、番人は番所の中に入り、門を閉じた。冠木門外通の見通しの際は、面番所はそのまま勤め、外張番人は引き払い、冠木門を閉めて番頭が枳形内を固め、福井藩邸・鯖江藩邸前の持場境に足軽のみ出して道の通行を止めた。また、全て見通しの際は非番の番頭一人が番所へ詰めて諸事を取締り、そのほかの役人は詰めなかった。このほか、近隣を通過した三日については藩士を派遣して様子を確認している（御成見）。

さらに、天保の勤番の時には、將軍の外出として日光東照宮への参詣（日光社参）があった。江戸時代を通じて、一九回しか実施されなかったが、この期間は、門番は、將軍不在の江戸城を守るといふ重責を担うこととなった。このため、非番・当番を五日交代とし、藩主自らが番に出ている。まず、出発当日は寅刻（四時）より門を開き、出発まで藩主が番所に詰めて御成と同様につとめた。そして將軍の不在中は、日中は家老が番所に詰め、さらに藩主自身が毎日四時（一〇時）に一度ずつ見廻りに行き、毎晩七時前より五時（四時前より八時）まで番所に宿泊して番を勤めた。門は暮六時より明六時（一八時より六時）まで閉め、通過者を改めた。そして將軍が帰城する四月二一日は、御成の時と同じように四時（一〇時）よりつとめ、藩主は通行を見届けてから、申刻過（一六時過ぎ）に当番の老中に挨拶して藩邸に戻った。

また儀礼は、將軍との関係にとどまらない。江戸城への登城日は、大名をはじめとする武家が、相互の資格を確認する重要な機会であった。天保の記録では、江戸城に登城する月並登城日は五日、五節句や正月の行事ほか行事日は六日、臨時の登城は二日しか記されていないが、とくに恒常的なものは省略されていると考えられる。

表 7 常盤橋門番の定式の年中行事

日付	種 別	行 事
1/1	出仕	暁寅中刻より大御門を開き、終日勤番。
1/2	出仕	卯の刻より大御門を開き、勤番。
1/3～5	出仕	御謡初。卯の刻より戌の刻まで大御門を開き、勤番。
1/6	出仕	御年越。夕八時より勤番。晩より松飾撤去。8日まで松飾御用車 10 輦通行。
1/7	出仕	七種。
1/8		今日より平日勤番。
1/10	御成	寛永寺の常憲院(綱吉)霊前へ御成。※
1/11	出仕	御鏡開。譜代大名も惣出仕。
1/14	出仕	御年越。夕八時より勤番。
1/15	出仕	御年越。夕八時より勤番。
1/17	御成	紅葉山御参詣。
1/20	御成	寛永寺の香琳院(家慶生母 文化 7 年没)霊前へ大納言(家斉)が参詣。※
1/24	御成	増上寺の善徳院(家康祖父清康)・秀忠御霊屋へ御成。※
2/1	出仕	日光御鏡開。日光門主・上野一山の出家中が登城。
3/3	出仕	上巳。
3/	出仕	公家衆対顔。
3 月頭		一橋門持場の鷹匠方の鷹を移動につき、見物人の制止。
4/17	御成	紅葉山参詣。
4/20	御成	寛永寺の大猷院(家光)霊前へ参詣。※
4/晦	御成	増上寺の有章院(家継)御霊屋へ御成。※
5/5	出仕	端午。
5/8	御成	寛永寺の厳有院(家綱)霊前へ御成。※
5 月中		破損所の見分あり。
5/17	御成	紅葉山御宮・惣御霊屋へ御成。
5/20	御成	寛永寺の香琳院(家慶生母)霊前へ右大将(家定)が御成。※
5/28		大伝馬町行事役が 6/5・7 の天王祭礼について挨拶。
6/4		大伝馬町月行事が 6/5 の天王祭礼で櫓中程まで神輿渡御で通行の制止を依頼。
6/7		南伝馬町天王の御輿が大手御橋まで渡御で、門通行の際に通行の制止。
6/8		中橋天神神輿が橋中程まで渡御で通行の制止。
6/12	御成	増上寺の惇信院(家重)御霊屋へ御成。※
6/15		山王祭礼 祭礼年にあたる年は勤番。※ 冠木門外固は非番方から出る。
6/16	出仕	嘉祥。
6/20	御成	寛永寺の有徳院(吉宗)霊前へ参詣。※
7/7	出仕	七夕。
7 月中		作事方が渡櫓を風入れのため開く。立ち会いを勤める。
7/14	御成	紅葉山御宮・惣御霊屋へ御成。
7/15		盆中の聖霊道具を堀に捨てさせないように、足軽 4 人立番。
8/1	出仕	八朔。
8 月中		破損所の見分あり。
9/8	御成	寛永寺の湊明院(家治)霊前へ御成。※
9/9	出仕	重陽。
9/10 頃		当番目付より、神田祭礼につき、警備の絵図を作成し、翌日提出するよう、指示。
9/17	御成	紅葉山御参詣。
9 月中		番所内外の障子張り直し。
10/1		2 月まで火鉢出す。
10/14	御成	増上寺の文昭院(家宣)御霊屋へ御成。※
10/24	(御成)	深徳院(家重生母)・孝恭院(家治の子家基)へ、名代(老中・若年寄)が明六時通過。
10/	出仕	玄猪。夕七時より勤番。
11 月頃		初雪が降ったら、徒目付・小人目付が見分に来る。
12/		越前守より、寒入に將軍へ献上する生鰯を夜中に通過させて欲しい旨、挨拶。
12/13	御成	煤払い。／亀有筋・小松川筋御成。
12/17	御成	紅葉山御宮・惣御霊屋へ御成。
大晦日		晩に松飾りを建てる。1/5 まで暮六時より提灯 2 張出す。
12/		田安家の屋敷で会府を建てるために車を来年一年間通すよう、指示。

天保 8～12(1837～41)年成立の「常盤橋御門年中行事」(遠山家文書)より作成。
※＝藩主も詰

登城日には、毎回、三組飾手桶などを飾り、早朝より大番所の壺・二の間で家老以下の藩士が麻上下、小頭以下は新しい看板に着替えて「御規式」の勤めを行った。そして、挨拶の作法は、通過する相手によって、相手が大番所を通行する時に藩士が白州で、足軽以下が地上で平伏する「白州下座」、下座台で平伏する「本下座」、「半下座」、姿勢を正すという軽い対応の「行儀直拍子木」と異なった。また、下座のタイミングにも作法があった。たとえば八月一四日の一橋家の通過に対する「白州下座」の場合、行列の先頭の者を確認したら平伏人数を大番所へ揃え、挟箱が福井藩邸の角に来たら白州まで進み、打物が通過する時に下り、駕籠が白州前に来たら平伏し、鎗が大番所を通り過ぎる頃に顔を上げる、というものであった。さらに、下座の場から移動するタイミング（「御下座筵離候心得」）も、行列が「雨落迄」にさしかかった時（中将の五家 盛岡藩のみ二間半）、「中仕切半間程先」（少将一〇家）、「中仕切半間程手前」（侍従一六家）、「二間」（四品五家、ほか七家）、「一間」（三六家）、「半間」（五四家）、「九尺」（一家）、そして通過直後（「不離」一〇家）、ほか旗本二二家（うち三尺が二家、ほか不明）と、格差が設定された⁽²⁸⁾。

各藩は、通過者への対応を判断するための帳面「下座帳」を作成した。さらに、足軽の中に挨拶の作法を判断する役（下座見）を設けた。天保九（一八三八）年四月には、門番足軽・中間を請け負っていた石塚喜兵衛が「難渋」のため、近年請負に加わった播磨屋藤兵衛が一人で請け負うことにしたいと願い出た。この際には、播磨屋の本業が道中人足の請負で、他家の門番の請負経験がなく、また「下座見^(中)仲間」も抱えていないことが問題となり、藩では「下座見仲間も無之候てハ安心も無之候間、迎も忝人にてハ相成不申」として、もう一人の請負の者を探すように指示している⁽²⁹⁾。顛末は不明であるが、下座見が外注化し、その雇用が藩にとって重要だったことがうかがえる。すでに宝永四（一七〇七）年に日比谷門番を勤めた際には、「御公義様御役人様方・御一家様下座帳

之通り御知せ可申上」という職務で「御召抱下座見足軽四人」のみを一人銀二〇匁で別途「桜田町大屋勘右衛門店請合荒川善兵衛」より雇用していることから、専門的な能力が必要であり、「下座見」が早くから専門職として外注化していたことがうかがえる。

では、常盤橋門番の二つの「下座帳」（Ⅰ文政九（一八二六）年、Ⅱ天保一三（一八四二）（四三）年）より、下座の具体的な対象と挨拶の格式を確認しておこう⁽³¹⁾（表8）。「白州下座」は、Ⅰによれば、上野門主、御三家・御三卿とその嫡子・妻、將軍家から他家に嫁いだ「姫君様方」が対象で、Ⅱでは「御馳走付之公家衆」が加えられている。これに次ぐ「本下座」の対象は、老中・京都所司代・大坂御城代・御側御用人・若年寄・門番の相番ほかⅠは六一家、Ⅱは七五家であった。「半下座」は、留守居のほかⅠは七四家、Ⅱは六三家であった。そして、最も軽い対応の「行儀直拍子木」の対象は、寺社奉行・側衆・大目付・町奉行・勘定奉行・作事奉行・普請奉行・目付であった⁽³²⁾。

Ⅰ・Ⅱの相違は、時期や各藩の拝領屋敷の移動に伴う登城門の変更によると考えられるが、基本的に対象となる幕府の役職は共通している。これは、さきの下座見の請負証文にある「御公義様御役人様方」であり、幕府の指示に基づく可能性が高い。天保の常盤橋門勤番時の一二月一六日には、若年寄本莊伊勢守が門を通過した時に、外張番所で下座の格を間違え、直後に藩士が同家の屋敷に詫言を入れている。八戸藩では、この時の下座見と平足軽に一日の謹慎を命じている。このように、これらの役職に対する下座は、幕府の秩序の表現として重要であった。

こうした役職者への対応がある一方で、役職とは関係なく「本下座」や「半下座」とされる旗本（表8*）の存在や、柳間（外様小藩）や菊間（譜代小藩）の大名で本下座、帝鑑間（譜代大藩）で半下座がとられるなど、大名の家格（詰間）と挨拶の格が対応していないケースが目される。これらは、さきの下座見の請負証文にある「御一家様」であろう。

表 8 下座の格式と対象

項目	下座帳Ⅰ（文政 9 (1826) 年）	下座帳Ⅱ（天保 13 ～ 14 (1842 ～ 43) 年）	藩名・* 旗本の石高と役職（Ⅰの段階）	大名の格（詰間Ⅰの段階）	下座の撤収の格	八戸藩との関係
白州下座	日光御門主	○日光准后★・新宮★				
	尾張中納言	○御三家★				
	紀伊中納言	○（御三家）★				
	水戸中納言	○（御三家）★				
	一橋□□（治斉カ）	○御三卿★				
	* 一橋兵部卿（斉礼）	○同（御三家御三卿）御隠居様方★				
	田安右衛門督	○（御三卿）★				
	清水式部卿（徳川斉順）	○（御三卿）★				
	御三家御三卿之御嫡子様方	○御三家御三卿之御嫡子様方★				
	同（御三家御三卿）御簾中様方	○同（御三家御三卿）御簾中様方★				
	同（御三家御三卿）御後室様方	○同（御三家御三卿）御後室様方				
	浅姫君（家斉娘）	○諸家 ^江 縁付之姫君様方★				
		御馳走付之公家衆				
本下座	御老中（大久保加賀守〈小田原〉・水野出羽守〈沼津〉・松平和泉守〈西尾〉・植村駿河守〈高取〉）	○（☆ 土井大炊頭〈古河〉・堀田備中守〈佐倉〉・真田信濃守〈松代〉・水野越前守〈浜松〉）				
	京都所司代（松平周防守〈濱田〉）	○（牧野備前守〈長岡〉）			牧野玄蕃頭（〈侍従〉中仕切半間手前）	
	大坂御城代（水野左近将監〈浜松〉）	○（青山因幡守〈篠山〉）				
	御側御用人（田沼内膳正〈相良〉）	○（☆ 堀若狭守〈飯田〉）				
	若年寄（水野壱岐守〈北条〉・森川俊知〈生実〉・増山弾正少輔〈長島〉・林忠英〈貝淵〉）	○（☆ 本多弾正少弼〈泉〉・遠藤胤統〈三上〉・本庄伊勢守〈高富〉・松平忠篤？）				
	信濃守（南部信濃守利済）	○（☆ 利済）・甲斐守（☆ 信侯、嫡子） * 弘化 2 年武鑑	盛岡	大広間	少将 二間半	■ 本家、二代正室
	伊達遠江守（村壽）	○（宗紀）・同大膳太夫（宗城）* 天保 11 年武鑑、宗城は天保 15 年家督相続か	宇和島	大広間	侍従 中仕切半間手前	■ 六代正室の実家の「家筋」
	松平肥後守（容和）	○	会津	溜間	（中将）雨落迄	
		奥平大膳太夫（昌猷）・同九八郎（昌腹）* 弘化 2 年武鑑	中津	帝鑑間	二間	七代正室の「御伯父之御統」／八代子信一と「縁組御申合二付」／九代信順の兄弟の養子先
	大久保加賀守（忠真）	○（△）	小田原	帝鑑間	二間	八代信真正室の実家
	稲葉辰次郎（幾通）	○	臼杵	柳間	一間	■ 「父下総守雍通御懇意二付被 仰合」
	溝口伯耆守（直諒）	溝口主膳正（△ 直薄）* 弘化 2 年武鑑	新発田	柳間	一間	■ 三代正室姉の嫁ぎ先 七代信房正室の実家
	毛利甲斐守（元義）・* 同（毛利）備後守（元寛）	毛利左京亮（☆ 元運）* 天保 11 年武鑑	長門府中	柳間	一間	■ 七代正室の「叔母様御統」
	相良壱岐守（近江守頼之）	相良遠江守（長福）* 弘化 2 年武鑑	人吉	柳間	一間	■
	堀内蔵頭（富之進直格）	○	須坂	柳間	一間	■ 七代正室の姉妹の嫁ぎ先
	松平右近将監（武厚）	○	館林	帝鑑間	一間	■
	伊達紀伊守（宗翰）	○（△）・同伊織（△）	伊予吉田	柳間	一間	■ 六代信依正室の実家
	織田越前守（信美）	織田伊勢守（信学、八百八）* 天保 11 年武鑑	高畑（畠）→天保元年～天童藩	柳間	一間	■
	池田丹波守（政範）	○	岡山新田（生坂）	柳間	一間	■ 七代正室の「古御統」

項目	下座帳Ⅰ（文政9（1826）年）	下座帳Ⅱ（天保13～14（1842～43）年）	藩名・*旗本の石高と役職（Ⅰの段階）	大名の格（詰問Ⅰの段階）	下座の撤収の格	江戸藩との関係
本下座	池田甚次郎（勇吉政共）	池田豊後守（信濃守の誤りか）	岡山新田（鴨方）	柳間	一間	■七代直房「御乗出之節御頼二付」
	織田愛之助（長恭）	織田丹後守（△ 長恭）*天保11年武鑑	芝村	柳間	一間	■五代信興正室の実家
	井伊掃部頭（直亮）	○	彦根	溜間	中将 雨落迄	■盛岡藩主利敬の姉の嫁ぎ先
	鳥居丹波守（壽三郎忠威）	○	壬生	帝鑑間	一間	■七代正室の「伯母様之御続」
	松平織部正（正敬）	松平備前守（正和、天保9年に家督相続）*弘化2年武鑑	大多喜	雁間	一間	■七代正室父の養母の「御舎弟」
	水野沓岐守（忠韶）・*同（水野）甲斐守（忠実）	水野山城守（忠實（順々）、天保13年家督相続）	北條→文政10年～鶴牧藩	菊間→雁間*天保11・弘化2武鑑	一間	■七代正室の「御兄弟」
	織田大膳（長孺）・*御同人（織田大膳）様奥方・*同（織田）専次郎（嫡子）	●半 織田淡路守（長裕）*天保13年武鑑	*2000石、高家	雁間	三尺（織田淡路守）	■六代娘の嫁ぎ先
	山口但馬守（周防守弘致）	○	牛久	菊間	一間	■七代正室の「御伯父様」
	松平加賀守（齊泰）	○・同筑前守	加賀	侯大廊下 年始・五節句御白書院月次御黒書院	（中将）雨落迄 在	
	松平讃岐守（頼恕）・*同（松平）大蔵大輔（貞五郎頼胤）	松平右京太夫（頼熙、弘化2年武鑑では嫡子、弘化3年に早世）	高松	溜間	少将 中仕切半間先	
	松平備後守（利之）	○	大聖寺	大広間	四品 二間	三代継室の実家、七代正室の姫の嫁ぎ先
	松平豊後守（齊興）・*同（松平）兵庫頭（齊彬）（松平又三郎）	松平大隅守（齊興）・同豊後守（△ 齊彬）*天保11年武鑑	鹿兒島	大廊下下之部屋*天保11・弘化2武鑑では「大廊下」とのみ記載	（中将）雨落迄 府	「御隠居溪山様 信真公江御懇意為遊候ニ付文政九戌年御先を被 仰入」
	松平陸奥守（齊義）	○	仙台	大広間	少将 中仕切半間先	
	細川越中守（齊樹）	○・同兵部大輔	熊本	大広間	少将 中仕切半間先	
	松平安藝守（齊賢）	○	広島	大広間	少将 中仕切半間先	「末家美作守様（広島新田藩）御乗出諸事御頼、右同断（信真公）ニ付御先を被仰入」
	松平大膳大夫（齊熙）	○	長州	大広間	侍従 中仕切半間手前	
	松平因幡守（齊稷）	○	鳥取	大廊下	侍従 中仕切半間手前	三代妹の嫁ぎ先 「当時御断」
	藤堂大学	○藤堂和泉守（高猷）*天保11年武鑑	津	大広間	少将 半仕切半間先	七代正室の「御兄弟」
	松平上総介（齊政）		岡山	大広間	（侍従） 中仕切半間手前	
	同（松平）紀伊守（信豪）		亀山		半間	三代正室の姉の嫁ぎ先、四代正室の実家 「当時御断」
	真田伊豆守（豊後守幸貫）	○	松代	帝鑑間	（侍従） 中仕切半間手前	
	松平左兵衛督（直韶）	松平兵部大輔（慶憲）*弘化2年武鑑	明石	大広間		七代正室の姫の嫁ぎ先
	松平錫（輝承）	松平右京亮（輝承）*天保11年武鑑、弘化2年では輝充。	高崎	雁間	侍従 中仕切半間手前	盛岡藩利敬姉の嫁ぎ先
	松平左京大夫（頼啓）・*同（松平）大蔵大輔（頼学）	○・○	西條	大広間	少将 中仕切半間先	八代正室の姉の嫁ぎ先
	松平阿波守（齊昌）・*松平伊豫守（齊敏）	○・○	徳島	大広間	少将 中仕切半間先	
	松平土佐守（豊資）	○・同対馬守	土佐	大広間	侍従 中仕切半間手前	
	松平肥前守（齊直）	○	佐賀	大広間	少将 中仕切半間先	
	松平越後守（康孝）・*同（松平）三河守（銀之助）	○（三河守）	津山	侯大廊下末之間、御礼之節厳首、佳節御白書院、月次御黒書院	（中将） 雨落迄 在	

項目	下座帳Ⅰ（文政9（1826）年）	下座帳Ⅱ（天保13～14（1842～43）年）	藩名・*旗本の石高と役職（Ⅰの段階）	大名の格（詰問Ⅰの段階）	下座の撤収の格	八戸藩との関係
本 下 座	松平越中守（定永）	松平和之進（定猷か、天保10年に家督相続）*弘化2年武鑑	桑名（陸奥白川）	溜詰*弘化2武鑑では帝鑑間	四品 二間	
	大久保出雲守（教孝）	○・同金五郎	荻野山中	菊間	一間	八代正室の姉の嫁ぎ先
	松平備前守（齊清）・*同（松平）美濃守（齊溥）	○（齊溥）	福岡	大広間	（侍従） 中仕切半間手前	二代正室の妹の嫁ぎ先 「当時御両敬御断ニ相成」
	上杉弾正大弼（齊定）	○上	米沢	大広間	侍従 中仕切半間手前	六代正室妹の嫁ぎ先
	御相番	○御相番★				
	京極彦岐守（高賢）	●半	多度津	柳間	一間	■「先様被合ニ付」
	山内遠江守（豊武）	○	土佐新田	柳間	一間	■七代正室の実家の遠戚
	松平丹波守（光年）・*同（松平）弾正少弼（光庸）	○（△）・同伊織（△）○（△）	松本	帝鑑間	一間	七代正室の祖母の実家／八代息子（信経）室の実家
	岩瀬伊豫守（岩城伊予守隆喜か）	→桜井庄兵衛	亀田	柳間	半間	
	羽太左京（正栄）	→神美山城守	*400 俵 本丸目付			
	阿部飛騨守（鐵丸正権）	阿部能登守（正備、天保9年家督相続）*弘化2年武鑑	白河	雁間	二間	八代娘於賢の嫁ぎ先阿部兵庫の「御本家筋」
	南部丹波守（信譽）	○（△）	* 5000 石 小普請組支配→七戸	柳間	御内玄関	■三代の兄（政信） 五代継室
	佐竹右京大夫（次郎義厚）	○	久保田	大広間	中仕切半間先	
	松平大和守（矩典）	○	川越	大広間	少将 中仕切半間先	
		立花左近将監（鑑備）*弘化2年武鑑	柳川	大広間	四品・二間	四品
	酒井左衛門尉（忠器）・*同（酒井）小五郎（忠発）	○	庄内	帝鑑間	二間	八代娘於文の嫁ぎ先仁正寺藩市橋家より養子「御先被仰入」
	仙石道之助（美濃守政美）	仙石讃岐守（久利）*弘化2年武鑑	出石	柳間	一間	「右古美濃守政美同断（御懇意）、旁御隣故被 仰合、天保七申年秋家来一乱ニ付二万八千石被 召上、三万石トナル」
	市橋主殿頭（長富）・*御同人様（市橋）奥方	○（△）	仁生寺	柳間	一間	※二代娘の嫁ぎ先（離婚）／八代娘於文の嫁ぎ先
	（老中）	植村出羽守（△）・同駿河守（△）・御同人様御新造様	高取		一間	八代娘於万世の嫁ぎ先
	分部左京亮（武吉光寧）	分部若狭守（光貞）弘化2年武鑑	大溝	柳間	一間	「古左京亮様若狭守様共御乗出候節 信真公御同道諸事御引請御世話被進候ニ付御先被 仰合」
	森芝次郎（長國）	森佐渡守（長國）*弘化2年武鑑	三ヶ月	柳間	一間	「御乗出候節 信真公御同道諸事御引請御世話被進候ニ付御先被 仰合」
	京極飛騨守（高有）・*同（京極）修理（高行）	京極甲斐守（高行）*弘化2年武鑑	但馬豊岡	柳間	一間	八代嫡子信経正室の叔父（実父の妹の嫁ぎ先）
	松平為五郎	松平近江守（長訓）*弘化2年武鑑	「内証分」（広島新田藩、文政7家督相続*弘化2武鑑）→のち広島藩主（安政年間）	柳間	一間	「御乗出候節 信真公御同道諸事御引請御世話被進候ニ付御先被 仰合」
		松前志摩守（昌廣）*弘化2年武鑑	松前	柳間	一間	「（信真公江）御懇意為進候ニ付右同断（文政九戌年御先被 仰入）」
		新莊主殿頭（直計）*弘化2年武鑑	麻生	柳間	一間	「御懇意ニ付御先より被仰入 但豊後臼杵城之稲葉家御隠居下総守幾通公御妹右真計公江被為嫁、右旁以御両敬被仰合」
		松平周防守（康爵）*弘化2年武鑑	棚倉	帝鑑間	一間	右同断（「信真公御懇意ニ付文政十一子年被 仰合」）
		有馬玄蕃頭（頼徳）・同上総介（頼永）*天保11・弘化2年武鑑	久留米	大広間	（中將） 中仕切半間手前	三代妹の嫁ぎ先 「当時御断」

項目	下座帳Ⅰ（文政9（1826）年）	下座帳Ⅱ（天保13～14（1842～43）年）	藩名・*旗本の石高と役職（Ⅰの段階）	大名の格（詰問Ⅰの段階）	下座の撤収の格	八戸藩との関係
本下座	戸田采女正（氏庸）		大垣	帝鑑問	二間	
	（寺社奉行）	太田摂津守（資功）	掛川	雁問		「御番所近所ニ付」（Ⅱ）
	久世長門守（廣運）	○	関宿	雁問		「御番所近所ニ付」（Ⅱ）
	加藤遠江守（泰濟）・*同（加藤）作十郎（泰幹）	○	大洲	柳問	一間	「泰朝公御乗出候節御頼ニ付 信真公諸事御引請御世話被進候ニ付御先より被仰入」
半下座	御留守居	「御本丸斗」 ○	*留守居			
	中川修理大夫（久道（通））	○	豊後岡	柳問	九尺	■
	牧野内匠頭（豊前守以成）		丹後田辺	雁問	半間	二代正室の妹の嫁ぎ先 「当時御両敬御断ニ相成」
	永井肥前守（尚佐）		美濃加納	雁問		四代正室の姉妹の嫁ぎ先
	本多弾正少弼（忠知）	（若年寄）	泉	帝鑑問	半間	
	稲垣長門守（定成）	○	山上	菊問	半間	
	小笠原長門守（数馬長坦）	○	* 3000石、中奥小性		○	■六代正室の姉妹の嫁ぎ先
	逸見左近（卯三郎長道）	逸見甲斐守（長道）	* 3000俵、本所深川火事場見廻		○	■七代正室の「御兄弟之御統」
	柴田七左衛門（康直）・*同（柴田）六三郎	柴田日向守（康直）・*同（柴田）七左衛門 *天保13年武鑑	* 2000石、両番		○	八代娘於清の嫁ぎ先
	花房万吉	花房＋金麦＋之助（鍔之助）	* 6228石7斗、寄合		○	八代娘於美那の嫁ぎ先
	阿部兵庫（正蔵）	阿部遠江守（正蔵）	* 3000石、寄合火事場見廻		○	八代娘於賢の嫁ぎ先
	溝口摂津守（直静）	溝口内記（養正）* 天保15武鑑	（横田領）大番頭	柳問	○	■七代正室の「御伯父様」
	溝口備後守（金弥直道）	溝口讃岐守（直清）	* 5000石、本丸小性組番頭		○	七代正室の「御伯父之御統」
	宇津□之助	○	* 4000石、寄合		○	八代正室の実家の「末家」
	大久保肥前守（采女教富）	○	* 6000石、西丸書院番頭		○大久保吉十郎	■（後筆）八代正室の姉の嫁ぎ先
	岡部丹波守（兵庫盛勝）	岡部勘ヶ由	* 4500石、小性組番頭		○	
	戸田主殿（光逸）	戸田孫十郎（光天）	* 5000石、百人組之頭		○	光逸が八代嫡子信経室の兄（兄〈松本藩主松平光年〉の実弟）
	戸田備中守（光大）	戸田隼人正（光武）	* 5000石、小性組番頭		○	光大の父が八代嫡子信経正室の叔父（実兄〈松本藩主松平光年〉の父の実兄）
	阿部大学（正信）	○	* 6000石、火事場見廻		○阿部大学・鍵次郎	八代娘於賢の嫁ぎ先阿部兵庫の親戚
	水野采女（虎之助忠篤）	○	* 2000石、側衆・御用御取次		○	*「溝口家御統」で八代の「御従弟之御統」
	杉浦肥前守	杉浦壱岐守	未確認			
		生駒鉄五郎	* 8000石、在所出羽国由利郡矢島	柳問	○主殿頭	／→生駒健三郎
	京極長門守（高朗）		丸亀	柳問	不離	
	伊東彦松（祐相）	伊東修理太夫（祐相）*弘化2年武鑑	飢肥	柳問	半間	
	藤堂佐渡守（高□）	○	久居	柳問	半間	
	黒田甲斐守（長韶）	●本	秋月	柳問	半間	
	亀井大隅守（茲尚）	●本 亀井隠岐守（慈監）*弘化2年武鑑	津和野	柳問	一間	「右（能登守）父大隅守茲尚公御懇意ニ付文政十三寅年御両敬被 仰合」
	大村上総介（純昌）	●本 大村丹波守（純顕）*弘化2年武鑑	肥前大村	柳問	一間	
	嶋津筑後守（忠徹）	●本 島津又之進	佐土原	柳問	一間	
	秋月筑前守（種任）	●本 秋月筑前守・同佐渡守	高鍋	柳問		右同断（「信真公御懇意ニ付文政十一子年々被 仰合」）
	木下大和守（俊敦）	○	日出	柳問	半間	

項目	下座帳Ⅰ（文政9（1826）年）	下座帳Ⅱ（天保13～14（1842～43）年）	藩名・* 旗本の石高と役職（Ⅰの段階）	大名の格（詰問Ⅰの段階）	下座の撤収の格	八戸藩との関係
半下座	六郷繁次郎（政恒）	六郷兵庫頭（政恒） * 弘化2年武鑑	本庄（莊）	柳間	半間	
	毛利出雲守（高翰）	毛利伊勢守	佐伯	柳間	半間	
	森勝蔵（忠貫）	森右兵衛佐（忠徳） * 弘化2年武鑑	赤穂	柳間	半間	■
	大田原飛騨守（愛清）	○	大田原	柳間	半間	
	遠山美濃守（友壽）	○	苗木	柳間	半間	
	鍋嶋紀伊守（直亮）	○	小城	柳間	半間	
	鍋嶋摂津守（直与）	○	蓮池	柳間	半間	
	九鬼長門守（隆國）・* 同（九鬼）靱負（隆徳）	○・* 同（九鬼）丹後守	摂津三田	柳間	半間 御両敬ニ被成	三代正室の実家
	細川采女正（利愛）・* 同（細川）邦衛（利用）	○	肥後新田	柳間	半間	
	毛利大和守（就寿）	毛利山城守（廣篤） * 弘化2年武鑑	徳山	柳間	半間	
	田村右京大夫（宗顕）	○	一ノ関	柳間	半間	
	堀丹波守（直央）	○	越後村松	柳間	半間	
	松平志岐守（定剛）	○	今治	帝鑑間	半間	
	細川熊之助（中務少輔立政）	細川豊前守（之壽） * 弘化2年武鑑	宇土	柳間	半間	
	小出信濃守（英発）	小出伊勢守	丹波園部	柳間	半間	
	木下宮内少輔（三之丞利愛）		足守	柳間	半間	
	鍋嶋安四郎（直永）	鍋嶋安四郎（安治郎） * 弘化2年武鑑、天保13年家督相続	鹿島	柳間	半間	
	佐竹志岐守（義純）		秋田新田（岩崎）	柳間	半間	
	九鬼大隅守（仙之助隆都）	九鬼式部少輔（隆都） * 弘化2年武鑑	綾部	柳間	半間	
	関備前守（長基）	関主斗	新見	柳間		
	大関呆二郎（呆二郎増儀）	大関伊予守（増儀） * 弘化2年武鑑	黒羽	柳間	半間	
	細川長門守（興徳）・* 同（細川）喜十郎（興祥）	○	谷田部	柳間	半間	
	松平長門守（刑部定保）	○	鳥取西館新田（若桜）	柳間	半間	七代の「御乗出」の時に「御頼ニ付」 両敬
	五島大和守（盛繁）	五島左衛門尉（盛成） * 弘化2年武鑑	五島（福江）	柳間	不離	
	久留島伊豫守（通嘉）	○・同采女	森	柳間	半間	
	片桐石見守（貞信）	片桐主膳正（弘化2年武鑑には助作＝貞照）	小泉	柳間	半間	
	土方大和守（義苗）・* 同（土方）主殿（雄興）	土方仙之助（備中守雄嘉） * 弘化2年武鑑	菰野	柳間	半間	
	伊東播磨守（長寛）	○・同主税	備中岡田	柳間	半間	
	谷鷹之助	谷出羽守（播磨守衛昉） * 天保11年武鑑	山家	柳間	半間	
	前田大和守（利和）	○	七日市	柳間	半間	
	青木民部少輔（重龍）	青木駿河守（重龍） * 弘化2年武鑑	麻田	柳間	半間	
	一柳美濃守（頼親）	一柳兵部少輔（頼紹） * 弘化2年武鑑	小松	柳間	半間	
	北條相模守（氏喬）	北條彦之丞（相模守氏久） * 弘化2年武鑑	狭山	柳間	半間	
	立花豊前守（種善）	立花主膳正（種温） * 弘化2年武鑑	下手渡	柳間	半間	
	織田大和守（信陽）	○	柳本	柳間	半間	
	加藤山城守（泰儔）	●本 加藤大蔵少輔（泰理） * 弘化2年武鑑	新谷	柳間	一間	「右父山城守泰儔公信真公御懇意ニ付」
	建部内匠頭（政醇）	●本 建部内匠頭	林田	柳間	一間	「（信真公江）御懇意為遊候ニ付右同断（文政九戌年御先刳被 仰入）」

項目	下座帳Ⅰ（文政9（1826）年）	下座帳Ⅱ（天保13～14（1842～43）年）	藩名・*旗本の石高と役職（Ⅰの段階）	大名の格（詰問Ⅰの段階）	下座の撤収の格	江戸藩との関係
半下座	一柳対馬守（末周）		小野	柳間	半間	
	毛利讃岐守（元世）	○	長府新田（清末）	柳間	不離	二代正室の実家「屋両敬被仰合、当時無之」
	松浦大和守（皓）	○	平戸新田（平戸館山）	柳間	不離	
	上杉駿河守（勝義）	上杉鞞負	米沢新田	柳間	半間	
		戸田七内（光新）	* 2500 石		○	「右同断（「信真公文政十一子年駿府御加番被蒙 仰候節」）、御同人（戸田七内光紹）駿府御定番被相勤、依而同年より被仰合」
		最上采女助（義昶）	* 5000 石、在所近江国蒲生郡大森	柳間	○	「信真公文政十一子年駿府御加番被蒙 仰候節、右義実公同二加番御勤、御相番被遊候ニ付、同年より被仰合」
	（寺社奉行）	堀若狭守（左近将監親義）*弘化2年武鑑	飯田	柳間	半間	
		青山大和守（幸哉）	郡上八幡	雁間	半間	二代正室の姉の嫁ぎ先「当時御両敬御断ニ相成」
	能勢市十郎（頼統）		* 2000 石、鎗奉行			
行儀所拍子木	巨勢日向守（勇次郎忠親）		* 5000 石、家定小性→小姓頭取			
	一 寺社御奉行（堀大和守（飯田）・稲幡丹後守（淀）・阿部伊勢守（福山）・酒井若狭守（小浜））	○（松平伊賀守（上田）・稲幡丹後守（淀）・阿部伊勢守（福山）・酒井若狭守（小浜））	*			
	一 御側衆	○	*			
	一 大目付	○	*			
	一 町御奉行	○	*			
	一 御勘定奉行	○	*			
	一 御作事奉行	○	*			
	一 御普請奉行	○	*			
	一 御目付	○	*			
（Ⅰ・Ⅱに未記載分）					井伊玄蕃頭（少将 中仕切半間先）	
					松平越前守（少将 中仕切半間先）	
					松平出羽守（少将 中仕切半間先）	
					松平隠岐守（少将 中仕切半間先）	
					丹羽左京太夫（侍従 中仕切半間手前）	
					松平出雲守（侍従 中仕切半間手前）	
					松平下総守（侍従）中仕切半間手前	
					牧野備前守（侍従 中仕切半間手前）	
					宗対馬守（侍従 中仕切半間手前）	
					榊原式部大輔（二間）	
					松平甲斐守（四品 二間 大和郡山）	
					本多隠岐守（膳所藩 四品 二間）	
					脇坂淡路守（一間）	
					内藤駿河守（半間）	
					内藤因幡守（半間）	
					内藤丹波守（半間）	
					戸沢千代鶴（半間）	
					松平玄蕃頭（半間）	

項目	下座帳Ⅰ（文政9(1826)年）	下座帳Ⅱ（天保13～14(1842～43)年）	藩名・*旗本の石高と役職（Ⅰの段階）	大名の格（詰間Ⅰの段階）	下座の撤収の格	八戸藩との関係
（Ⅰ・Ⅱに未記載分）					酒井大学頭（出羽松山二間）・酒井石見守（出羽松山 半間）	
					中山備前守（三尺）	
					松浦壱岐守（不離）	
					松平佐渡守（広瀬 不離）	
					松平志摩守（母里 不離）	
					松平大助→佐渡守（不離）	
					小笠原佐渡守（不離）	
					織田出雲守（柏原藩 不離）	七代正室の「伯母様之御統」
					○嶋田錦三郎 1800石 小姓組酒井組	八代嫡子信経室の「御統」

- (註)1 I = 文政9(1826)年9月「常盤橋御門御番所下座并途中下座牒」（遠山家文書）、II = 天保13(1842)年4月～14年5月「常盤橋御番所御勤中下座帳」（八戸市史編纂室蔵宗（糠塚）家文書）。IIについては、Iと記載が一致するものは○印を付し、異なる場合は記載した。また、格式が異なる場合は●を付した上で半（半下座）・本（本下座）と記した。括弧名の名前、石高や詰間・役職は、文政6・13年の須原屋版武鑑、『寛政重修諸家譜』、『柳宮補任』、『旗本家百科事典』より確定した。
- 2 IIの欄の★ = 交代途中で「惣下座」、☆ = 「行列片寄騎馬之面々下馬下座」、△ = 「行列初何れ片寄□通御番頭斗下座」。「○」は撤収の格が未記載であることを示す。
- 3 下座の撤収の格の欄は、弘化2年12月「御両敬御同席様方并御懇意之御方伊呂波寄留帳」（及川（類家）家文書）による。
- 4 八戸藩との関係の項目は、「御両敬御申合候来記」（八戸市史編纂室蔵宗（糠塚）家文書）による。■は寛政8～10年「御 両敬」で「両敬」の家を示す。

八戸藩士が作成した史料の表題に従えば、「御一家様」とは「両敬」、江戸城の詰間を同じくする柳間の「同席」、そして「御懇意之御方」であることがわかる。⁽³³⁾つまり、これらの下座は、八戸藩南部家との血縁関係や藩主同士の交際に対応したものであった。寛政八（一〇）（一七九六（九八））年で確認できる「両敬」関係の家は、Ⅰ・Ⅱではすべて下座の対象となっている（表8の「八戸藩との関係」の■印⁽³⁴⁾）。また、ⅠからⅡで半下座に新たに加わった旗本二家（戸田七内・最上采女助）は、八代藩主信真が駿府城番勤務時の駿府定番・駿府城番だったことから、文政一（一八二八）年に本下座に新たに加わった松前藩主・棚倉藩主、および半下座より本下座となった津和野藩主・高鍋藩主は八代藩主と「御懇意」のために、文政九・同・同一・同九・同一三年に五家はそれぞれ両敬になっている。このように、交際関係の変動に伴って、下座の対象や格も変化したのである。なお、Ⅱをほぼ同時期に作成された鍛冶橋門番の「御両敬御同席様方并御懇意之御方伊呂波寄留帳」と比較すると、Ⅱには「留帳」記載の家のうち二七家が見られず、またⅡ掲載のうち六家が「留帳」には掲載されていない。前者は門による通過者の違いによるもので、後者六家のうちとくに掛川藩主・関宿藩主は常盤橋門番所の「近所」という門固有の関係によるもの、他の四家は家同士の関係の変動の結果と考えておきたい。

このような武家同士の関係性に基づく下座の作法を、荻生徂来は『政談』で次のように述べている。⁽³⁵⁾

内曲輪・外曲輪の御門番をする侍・足軽が、己が主人の親類に下座する事いはれなき事也。子細は、内曲輪・外曲輪も畢竟は郭門なり。然れば此番所は 公義の御番所也。しかるに私の下座は門違いなり。惣下座の仁の外は、下座堅く有間鋪事也

しかし、徂来が批判した「私の下座」は、当事者にとっては重要なものとなっていた。たとえば、勤めをはじめて間もない五月五日には、下

座見より現場の責任者（藩の番頭）に、本家である盛岡藩の藩主の通行の際の対応について問い合わせがあった。「下座帳」では「本下座」とあるが、呉服橋門番を勤めた時は「足軽斗白州下座」という形をとったので、今回はどうするか、また呼びかけ（「御名前御呼掛之儀」）は名前だけにするかどうか、というものである。藩では検討のうえ、呉服橋門番の際の対応は誤りで、以後は「本下座」とすること、また呼びかけは名前だけで嫡子にも呼びかけてよい、と指示している。このほか、一八世紀初頭には、門番に詰めている番頭より、「下座帳」に記載漏れだった「松平肥前守」（福岡藩主黒田宣政）について、「如何下座仕候哉」を「明朝迄」に伝えるよう要請があり、「黒田伊勢守様（直方藩主黒田長清）・黒田隠岐守様（秋月藩主黒田長軌）下座仕候様ニ」と指示し、「下座帳」に載せている。⁽³⁶⁾ もちろん、こうした挨拶の対象や格は、幕藩関係の秩序とは無関係であった。

このように、通過者の確認は、最終ラインである大手三門では防衛上重要であったが、内曲輪門の場合も、夜間の通過者のほか、儀礼における武家の通過者について秩序を確認する機会として担当藩にとって重要であった。ただし、その秩序の大部分は、大名家の私的な「家」の関係に基づくものであった。藩が交代すれば、同じ門であっても挨拶の対応は変わったと考えられる。大名家が門番役を担うことにともなって、幕府の儀礼や格式とは別の次元で大名間の儀礼の場としても機能することになったのである。

(5) 祭礼

さらに、非日常の行事として、祭礼にともなう警護があった。最大のものは、隔年開催ではあったが、神輿が門を通過する六月一五日の山王祭礼である。この際には、前日より門の清掃や持場の草取・「大掃除」を行い、当日は暁七時（四時）より矢来や台提灯を設置した。また、藩

士・足軽以下が着用する花色（はなだいろ）法被七六枚（三六枚は屋敷から運搬、残りは番所置付）、菖蒲袴五八枚（四〇枚を屋敷より運搬、残りは番所置付）、花色木綿看板四五枚のほか、竹柄杓・茶船・金屏風・赤合羽・中抜草履・茶碗・蠟燭・提灯・棕櫚箒・布巾・茶台・煙草盆などの諸道具を準備した。神輿の通過は四時（二〇時）で、花色の法被や看板、菖蒲袴を着用した番人たちが門を固め、門外には非番の藩より警護を出した（図4）。当番の藩主も下座台で敬座し、七時過（一六時）に祭事が終了すると、通常勤務に戻った。警備の幕府の小人目付や町奉行所同心らへの接待も行っている。このほか、六月七日の南伝馬町の天王祭礼でも神輿が門内を通過し、五日の大伝馬町天王祭礼と八日の中橋天王祭礼では橋の中程まで神輿渡御があったため、町の依頼で通行の制止や警護を行っている。また、神田祭礼の際にも警備を強化している。⁽³⁷⁾ 祭礼の警備は、町と接する内曲輪門番としての勤めといえよう。

(6) 火事

一方、非常時の職務が、火事の際の対応である。曲輪内の出火はもちろん、大火や強風で門が風下にあたるときは、当番の藩主が火消を連れて馬でかけつけ、状況によっては非番の藩主もかけつけることとされた。また、番所からも屋敷に連絡の早便を送ることとされた。常盤橋門の場合、出動にあたってとくに重視された出火範囲は、東は堺町・横山町近辺迄、北は筋違橋内通飯田町迄、西は半蔵門まで、南は山下門辺までである（図1）。両方の藩が出動した際は、当番は門内を守り（「固」）、非番が外張番所の右側の河岸で消火（「防」）にあたった。出動・撤収にあたっては、隣接する神田橋門・呉服橋門の状況をみて「御並ニ准シ」て行動をとり、また連絡を取り合うことが求められた。⁽³⁸⁾

天保の記録では、芝口一丁目（七月八日）・下谷金杉二丁目（八月一七日）・桜田久保町（三月二六日）の出火でそれぞれ一回ずつ火の見

を出しているが、いずれも出勤に至ることなく鎮火している。この年の実際の出勤は、一月二七日の暁子刻過（〇時ごろ）の一回だけであった。この時の火元は、常盤橋門に近接した福井藩邸であった。当番であった八戸藩はすぐに面番所を取り払い、開門して福井藩邸の者などを逃がし、火事装束を着用し、所定の場所に台提灯・馬口洗桶などを出し、直ちに上屋敷と相番の人吉藩邸に出馬の連絡をした。すぐに両家からは藩主と藩士がかけつけ、門に詰めた。また、若年寄・目付・使番・町奉行が定番所に詰めることになっていたが、すでに危険な状態となったので、用番老中・留守居・作事奉行・目付へ連絡した。その後、ようやく卯刻過（六時ごろ）に鎮火し、両藩主は藩邸に帰り、門番は通常の勤務に戻っている。このほか、内曲輪門は、江戸城の防火や幕府施設の防火を目的とした方角火消や旗本がつとめる定火消、あるいは火事場で指揮をとる役人（使番・目付・火事場見廻役³⁹）の詰場（寄場）となった。天保の記録では、常盤橋門が詰場となったのは本所二ツ目（二月一八日）・浅草小柳町（二月二一日）・四日市堀留（三月二八日）・両国辺（四月一七日）からの出火の四回で、八戸藩も大門を開き、大番所を幕府の使番らに明け渡し、提灯・洗桶などを出して、火消装束で門に詰めた。このうち一回は、藩主も詰めている。

以上、本章では、八戸藩の事例を中心に、内曲輪門の職務を検討してきた。内曲輪門は、堀を隔てて町と接していたため、大手三門に比べ、都市の番としての側面が強かった。とくに通過者、空間の管理、祭礼の警護といった場面では、より都市社会と直接的に接点を持ったといえよう。また、江戸城の防衛という点では大手三門より重要度は低く、通行の規定も緩かったが、江戸城消防の際の詰場となり、また幕府儀礼における演出装置、武家同士の家の関係を確認する場として機能したといえよう。

② 門番役の文書作成・管理と運用

前章では、内曲輪門の機能を検討してきた。すでに述べてきたように、大名がつとめる門番役は、幕府から老中奉書で命じられた二藩がつとめた。そして、参勤交代に伴う藩の交代に加え、一〇日おきに担当藩が交代する（内代）というシステムをとった。さらに、八戸藩の常盤橋門番の勤務では、自藩の中で五日おきの二交代制をとっている。庄内藩の大手門番勤務でも同様であり、平戸藩の神田橋門番勤務は三日交代（「小代」後掲表12参照⁴⁰）であるなど、おそらくこうした勤め方が一般的だったと考えられる。このように頻繁に担当者が交代する中で、円滑にかつ継続的に職務を遂行するためには、口頭ではなく、文書による伝達や情報蓄積が必然的に求められることになる。また、変動しない役所（番所）が存在するため、文書は各家の持ち回りではなく、基本的には番所に道具とともに「置付」となった。

門番を直接管轄した幕府役人は、目付（「徒目付—小人目付」）である。八戸藩が天保期に常盤橋門番を勤めた際の歳暮の送り先に、御用頼みの懇意の小人目付（「定御頼小人目付」）七人のほか、小人押二人、武器掛徒目付二人・同小人目付四人、松掛徒目付二人・同小人目付四人、草掛徒目付二人・同小人目付三人、西丸小人目付二人があげられているように、幕府役人はさまざまな職務に分けて設定されていた。日々の業務のほか、こうした多数の役人からの日々の指示や問い合わせとその対処、あるいは他の城門との連絡（門継）などを文書で記録し、伝達していく必要があったのである。

本章では、大手三門もふくめ、藩が交代で勤める門番役がどのような文書によって運用されたかを検討していきたい。主に、内曲輪門については神田橋門、大手三門については大手門をとりあげる。

1 引継文書の概要とその意義

(1) 当座の引継文書

まず、実際の勤番開始前に当座の引継で渡される文書を確認しておきたい。

第一は「申送書」である。宝暦九（一七五九）年に八戸藩が小野藩より鍛冶橋門番を引き継いだ際には、勤番開始前にまず先番の小野藩より「覚」を受け取った⁽⁴¹⁾。その内容は、八戸藩が「御番所勤方書付」と記載しているように、基本的には当座の挨拶先（幕府の御徒目付や先述した近隣の城門、近接した武家屋敷の門番・辻番・町人など）、および破損箇所など引継事項を示したものである。八戸藩が翌年に狭山藩に番を引き継ぐ際に「先格之通、勤方之場以書付申送」として同様の内容の文書を渡していることから、こうした引継はある段階からシステム化して恒常的に行われていたと考えられる。通常の内代でも、挨拶先を省略したもの⁽⁴²⁾が作成された。左は大手門番の場合のひな形である。

覚

- 一、何月何日当御門持場之内御破損之内左之通
 - 一、当御番所屋根棟際瓦五尺程之所落申候
 - 一、渡御櫓北之方白土所々落相見申候
 - 一、冠木御門高塀棟瓦三ツ相見申候
- 右者昨夜中之風雨ニ而破損仕候御届申達候所、御徒目付何某殿承知之、無程御小人目付何某方為見分ニ相越候
- 一、同日従御当番御目付中様御小人目付何某方を以、御門番両冊御帳可差上旨被仰下、即差上候所、無程御戻候儀ニ付相改候処、
- 何之御役分何之御役^江 何某様
- 何之御役分何之御役^江 何某様
- 右両冊之御帳右之御序へ御書入ニ遣候

一、同何日御当番所へ御書付、当御門御櫓左右擬宝珠鉾釘処々抜所相見申候段、御届申達候所、御徒目付何某殿被受取之、無程御小人目付何某方被相越被致見分候

一、同何日従御当番御目付中様・御小人目付何某方を以御門番左之通被仰付候ニ付、御鑑札引替可申旨被仰下之

御鑑札壹枚

御引上

外桜田何某様

御家来何某へ相渡之

御鑑札壹枚

右御代何某様

納

御家来何某分受取之

一、同何日従御当番御目付中様・御小人目付何某方を以、和田倉御門後御堀之内埋り、御普請方御見分、今日より船入候旨、尤御用相済候ハ、御断返可有届候間、御断被仰下之候

右之通御座候、其外委細置付帳^江記置申候、以上

月日

右屯通

このほか、初めての勤番では事前にもう一点の文書を書写することが重要であった。八戸藩は相番の七日市藩より、勤番開始前に「申合之覚」（別称として「申合書」、「被仰合」、「被仰合書」、「仰合書」など）を借用し、写を作成している。八戸藩の記録で「鍛冶橋御門御勤方書付」とも表記しているように、御成や通行者の改めなどに関する当該門番の勤務や作法・慣習について、具体的にかつ詳細に記したものである。次に示したのは、書写の経緯である⁽⁴³⁾（括弧内は筆者の加筆である。以下同じ）。

一、十左衛門（斎藤 七日市藩の担当者）^江彦右衛門（菅 八戸藩の担当者）無急度承候ハ、此方大和守様（七日市藩）分被仰合之御書付被遣候、此義御先番様分も被仰継候哉、是迄大和守様・土

佐守様（小野藩）被仰合之御書付御座候哉承候処、御先番土方河内守様（菰野藩）・片桐石見守様（小泉藩）被仰合、右之御書付出来致候、大和守義者河内守様御代り故、石見守様分被仰繼二面御座候、依之此度一柳様御代御務被成候故大和守方分申繼候義二御座候

右によれば、さらに先番であった菰野藩と小泉藩が相談の上で作成したものを七日市藩が相番となった小泉藩から引き継ぎ、今回小野藩と交代した八戸藩に七日市藩が相番として引き継ぐ、という形で継承するという。つまり、藩が交代すると相番の者から引き渡されるものであった。菰野藩・小泉藩の作成以前にもおそらく存在したと思われるが、少なくともこの申合書からは借用して写すことがシステム化している。

大手門番の場合も、庄内藩の天明期の記録⁽⁴⁾によれば、宝暦二（一七五二）年九月作成の「申合」を「大手御番所御譲書」として後任に譲り渡していた（「右申合之書付、大手御門番交代之者へ可相譲候」）。このほか「申合」は、勤務中も相番からの提案で適宜作成されるように、安永六（一七七七）年七月には、相番の松代藩より書付が届き、庄内藩が付札で回答（「挨拶」）することで「申合」が成立している。天明三（一七八三）年二月にも小浜藩と同様の経緯で「申合」を作成している。「申合」とはこのような書面での合意形成による取り決めに表現したものと考えられる。ただし、この宝暦二年九月の「申合」の末尾には、こうしたその都度の「申合」は譲り渡しからは例外とする（「猶相番時宜之申合格別之事」と書き添えられており、恒常的に引き継ぐべき基本の「申合」と、臨時の「申合」があったようである⁽⁴⁵⁾）。

このように、内曲輪門・大手三門とも、以上の二種の文書によって、当座の勤務の引き継ぎが行われた。しかし、この二種の文書のみでは勤めは遂行できなかった。さらに実際の先例や参照すべき情報が文書化され、番所において、道具とともに引き継がれたのである。以下、内曲輪

門と大手門について、それぞれみていこう。

（2）内曲輪門の置付文書

表9は、先述の宝暦九（一七五九）年に八戸藩が鍛冶橋門番に就任した際の、番所での引継文書・鍵・道具・「印鑑」である。文書は、元禄一一（一六九八）年五月の「定」・享保六（一七二二）年閏七月の「定」などを収めた「古御条目」二冊（2）や元禄八年二月一日の「覚」（「武器御定書」（3））が一箱（1）3、元禄一四年五月二十五日の「御門番辻番^江申渡之覚」（酒酔の保護）や宝永三（一七〇六）年正月二十九日の「御清之節大手・内桜田・西丸大手其外御道筋御門番勤之覚」などの書付が一箱（4）、以前の「御勤番帳」が二箱（7）、「御勤番帳」一冊と「御条目写」・「書留帳」が一箱に入れられていた⁽⁴⁶⁾（8）10。8）10が収められた最後の一箱がおそらく当座使用する現用分をまとめたもの、そのほかは先例として参照される半現用のものであろう。

表10は、文政四（一八二二）年四月に平戸藩が神田橋門に初めて出番した際に、相番から引き渡された道具、鍵と文書のリストを記載順に示したものである。道具⁽⁴⁷⁾については13のほか、建具や桶など番所に付属した道具も受け取ったが、後述するように重視されたのはこの鍵と文書であった。1）5の鍵のうち最も重要なのが、冠木門・櫓御門の二つの門の開閉にかかわる1である。文書は一九種書き上げられているが、表題からみて10）12・14）18・24は御成・外交使節・祭礼など個別の事柄に関する冊子で、全般にわたるものが6御条目箱に入れられた「書付」と、「御番所勤向被仰渡并伺等之義委細」を示した7「置帳面」四八冊とその索引8「置帳呼出目録帳」二四冊、9「御請書御届書控」二冊（ほか古帳三二冊）、番所の持場を示した19「御番所持場絵図面」で、ほか現用の文書が通行にかかわる21・22であった。さきの鍛冶橋の「御勤番帳」は7「置帳面」に該当すると思われる。収納状態は「御条目箱」のほかはつ

表9 鍛冶橋門番の引継書類

番号	表 題	数 量	備 考	収納情報
1	御定目	1 通	「外写一通」	壺箱入
2	古御条目	2 冊		
3	武器御定書	1 通		
4	御書付	数通		壺箱入
5	印鑑	3 枚	「右之外鑑札有之候処、寅ノ六月中遠江守当番之節引上ケ候□□付、御目付中様江差上申候、右壺箱入」	
6	御門鍵	5 具		二之間ニ有之
7	御先番様方御勤番帳	2 箱		壺箱入
8	御条目写	1 冊		
9	書留帳	1 冊		
10	大関伊予守様・松浦大和守様御勤番中御書上勤番帳	1 冊		
11	弓掛	1 ツ		
12	鉄炮掛	1 ツ		

(宝暦9(1759)年「覚」(「鍛冶橋御門勤方巨細留他」八戸市立図書館蔵八戸青年会旧蔵本))

表10 神田橋門番の引継文書

番号	名 称	数 量	収納状態	備 考
1	御門之御錠鍵(渡御櫓御門 3 通、冠木御門 2 通)	5 通		
2	笠木堀錠鍵	小箱入		
3	冠木御門外出柵之鍵	1		
4	外張番所出柵鍵	1		但有非常御渡ニ成ル
5	神田上水御春屋懸り石柵鍵	1		但去酉年御普請方御渡ニ成ル
6	御条目箱	1		但御条目并御壁書之他、古来之書付類入
7	置帳面	48 冊		但御番所勤向被仰渡并伺等之義委細有之
8	右置帳呼出目録帳	24 冊		
9	御請書御届書控	2 冊		但古帳三十二冊「下ケ札 新規帳面壺冊 当辰三月相増」
10	朝鮮人来朝ニ付勤方帳	1 冊		
11	琉球人参府之節伺書	1 袋	但次之間長持之上釣箱之内ニ有之	
12	道具類控帳	1 冊		
13	上野 御成之節外張固并同所道具共			
14	遠藤但馬守様御屋敷内ニ引取一件帳	1 冊		
15	日光 御社参御用留置帳	1 冊		
16	神田祭礼之節勤方帳	1 冊		
17	出火之節火消御用通方一件帳	1 冊		
18	通御 御成之節御両番様御不快之節、是迄御伺之処御届ニ相成一件帳	1 冊		
19	御番所持場絵図面	1 枚		
20	品々絵図其外入用之品小引出之内ニ有之		(筆筒か)の引出	
21	御武器御修復方從御目付中様御渡被成候紙・印鑑其保有之			
22	御三家様方車年中御断、其余諸家様当年中御断、或者月御断等夫々筆筒引出之内入有之		筆筒引出	
23	置帳面筆筒鍵 御条目箱之内平日入有之		御条目箱之内	
24	御番所置付諸道具帳面	1 冊		但御差引等者無御座候
25	土居之上並木松毎月廿七八日之内御届□			

(「神田橋御勤番中日記」(文政4(1821)年4月 国立歴史民俗博物館蔵))

きりしないが、「置帳面」が入れられた「置帳面筆筒」があり、「御条目箱」に入れられていた鍵でおそらく施錠されていたこと、11「琉球人参府之節伺書」が「次之間長持之上釣箱」に収納されていたことがわかる。22は「筆筒引出」に、20は「引出」に収納されていたが、「置帳面筆筒」をさしているのかは不明である。

宝永四（一七〇七）年の日比谷門の「御定目入候箱」は、蓋は「檜さんふた」、身は外形が高さ二寸（うち足四分）・幅九寸・長さ一尺二寸一分半で木の厚さは二分、真田紐（幅四分・長五尺五寸）で結ばれていた。また、内袋は長さ一尺一寸五分・幅九寸で、この中に「御定目帳上西ノ内二通・覚書同断」が入れられていた。⁽⁴⁹⁾

（3）大手三門の置付文書

大手三門についても、庄内藩の大手門番の事例を確認しておきたい。⁽⁵⁰⁾

天明期の内代では、侍一五騎ほか計一六六人の行列を仕立てて門前の北下馬札に到着すると、目付兩人が若党二人ずつと鎗を持たせた草履取を連れて門に入り、番所の縁側から中に入り（図5）、まず相番の物頭・目付より鍵・文書を受け取った。

鍵・文書は並べられた状態で、美濃紙の上包に「覚」と記された中奉書切紙の目録を渡された。⁽⁵¹⁾ 左は、その内容である。

- 一、御門鍵錠 十
 - 一、御門帳両冊 一箱
 - 一、御鑑札 一箱
 - 但五拾式枚
 - 一、御法令書写 一箱
 - 一、御張紙并御書付品二入 一箱
 - 一、置付帳長持入 八棹
- 天明八申年小笠原様・真田様御番中置付帳置場致出来候

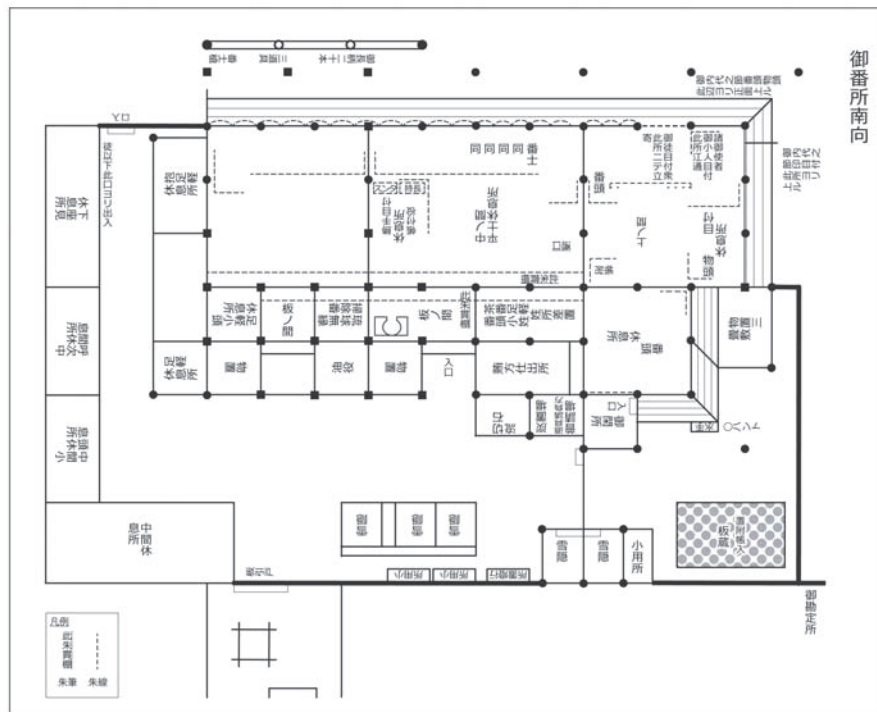
右目録を以受取申候

このうち、鍵、御法令書写（御条目、御定書）、幕府から伝達された張紙・書付、「置付帳」（以下置帳と表記）⁽⁵²⁾ は内曲輪門と共通する。このほか、鑑札と御門帳（常出入）と享保期に作成がはじまった「火事地震出入」の各一冊）は通行者を照合・確認するためのもので、内曲輪門より嚴重ではあるが、基本的な機能は神田橋御門の21・22と同じものである。大手門の置付文書については、内曲輪門と文書のまとめ方がやや異なり、また簡略化されていて絵図や道具帳の記載がないが、基本的にはほぼ同じ構成といえるだろう。このうち、置帳（置付帳）は、おそらく長持八棹という分量になったため、天明八（一七八八）年に置場が設けられた。⁽⁵³⁾ 当初は「其俣物置并庇下二有之」（次掲史料）という状態であったようであるが、文化二二年の引き渡しの時点では、「置付帳板蔵」に収納されていたことが判明する（図5）。

このほか、別途「御大工頭御切手何封并当年之置付帳巻冊」を受け取った。前者は江戸城内の施設の修復等にかかわる大工頭らの配下の臨時通過者の切手で、⁽⁵⁶⁾ 後者が使用中の置帳である。これらは、別途引き継がれる現用の文書であろう。道具の受け渡しの記述より、奥の「置付帳棚」（掛家一枚・貫棚二枚）が確認されるが、おそらく現用分はこちらに置いたのである。このほか、引き継ぐものや「御帳直」などがあった場合は口頭で伝えて、引き渡された。

目付に続き、徒目付らが御幕長持を勝手口より入れ、相番の勝手役より「御番所置付之御道具・御帳入箱并勝手諸道具」を受け取った後、相番の幕を下ろして自藩の幕をかけ、武器が運び込まれていく。一通り交代が済むと、番頭より幕府の御徒目付当番所に「御当番書」を提出し、初めての場合は百人組番所と百人組四組の組頭への挨拶を行い、交代が完了する。さらに番頭は、自藩の家老と相番の同役に紙面で、また関係する他門番所の番頭に廻状で連絡した。

図5 大手門番大番所



(「大手御勤番中諸絵図」鶴岡市立郷土資料室蔵閑散文庫より作成)

受け取った鍵・文書は、藩の各担当に渡され、管理がゆだねられた。

一、御目付、御帳・御鑑札等夫々へ相渡候、左之通

御門錠鍵 御足輕小頭二相渡之

御鑑札箱入 御鑑札方御番士へ相渡之

御門両冊御帳 御目付預り 御番頭休息所二差置

御法令写箱入 御番頭へ差出之

御張紙入箱 同

御大工頭切手何封 同

当年置付帳 同

置付帳長持八棹入 是ハ其俣物置并庇下ニ有之

(4) 慣例としての文書の書写

このような勤番交代前の二種の文書と番所での引き継ぎという、システム化された文書の引き継ぎのほか、さらに個別の文書の貸借があった。最初の勤番の際には前もって、先番に帳面の借用を願い出ている。次に掲げたのは、庄内藩が天明期に大手門番を引き継いだ時の例である。

(前略) 但、御番所初^面御受取之節者、先番主様へ先達^面御留守居以御使者御頼被仰遣、左之御帳面御借用被成候、御番頭より^茂以御紙面掛合申候

一、火事地震出入御帳写

一、常出入御帳写

一、御張紙写

一、御口上御断写

一、常出入火事地震いろは寄帳

右之通是又受取申候

五点はいづれも門の通過者の判定にかかわる文書で、うち最初の四点は門番所の置付文書の「写」、「常出入火事地震いろは寄帳」がこれらのイ

ンデックスである。つまり、通過者の取り締まりの業務については、門番の担当藩は写とインデックスを作成し、あらかじめ勤番前に予習を行っていたのである。おそらく、慣例化した行為だったと考えられる。こうして作成された文書も「伊呂波寄帳等先御番主より御借用之御帳有之候へハ、是又御番頭江出シ、御番頭より夫々へ相渡之」と、さきの置付文書とともに、各担当に渡された。このほか、庄内藩が準備する道具の中には「武鑑 一通」もあり、前章でみたように、挨拶において通過者や登城する者の識別が重要視されていたと考えられる。

以上、引継についてみてきたが、内曲輪門・大手三門とも門番の交代にあたつてまず重要だったのは、施設の管理の象徴である鍵と、勤務内容の引継を意味する文書の引き渡しであった。とくに注目したいのは、こうした引継にあたり、幕府の役人はまったく立ち会わず、完了の報告を受けるだけだった点である。門番役は担当藩同士で引き継がれ、その際に重要だったのが文書による情報の蓄積と伝達だったといえよう。

2 置帳の成立と展開

(1) 置帳の成立

前章で、頻繁な交代の中での勤務の遂行が、文書によってなされていたことを確認した。ここでは、その基礎となった置帳に注目したい。

置帳は門番所で作成される基本帳簿である。引き継ぎの際に作成される「申送」も置帳を前提としたものであった。左は、庄内藩の大手門の例である。⁽⁵⁷⁾

(前略) 御番中都而置付帳江相記候日々御用留之内、相変候儀者勿論、当用之事とも大様拾之、中奉書巻紙江悉相認之、御番頭交代之節右書面を以申送之、美濃折掛上候、申送候而認之(後略)

「申送」の本文末尾にも、「一、此方様御勤番中之儀委細置付帳ニ記置候、

御一覧可被下候」と示されるように、「申送」は置帳のいわばインデックスという関係にあった。⁽⁵⁸⁾

置帳の存在は、門番役を担った藩の藩政史料や担当家臣の作成文書で確認することができる。大手三門については置帳の「抜書」が、また内曲輪門でも前節でふれた鍛冶橋門・神田橋門・外桜田門、また唯一の大名勤番の外曲輪門である幸橋で確認できる。⁽⁵⁹⁾ おそらく置帳は、大名勤番の各門番所で作成されていたと考えられる。

では、この置帳はいかなる過程を経て成立したものであろうか。ここでは、神田橋門の置帳の写本を検討したい。⁽⁶⁰⁾ まず、第一冊目の冒頭には、神田橋門番における置帳の成立経緯が示されている。

覚

一、神田橋御門番所御用箱之内ニ有之候前々より之御條目、度々被□仰出御壁書并其節之当番より書送等有之候得共、致耽候留帳無之候ニ付、今般神田橋御門番追々可被成御勤御方々様御番頭・御留守居申合、当御門□帳拵置、從是□段々被 仰出候趣後鑑ニ可留者此帳ニ可記旨申合候処、如左、京極佐渡守様(多度津藩)・伊東豊後守様(飢肥藩)・稲葉右京亮様(白杵藩)・藤堂佐渡守様(久居藩)・黒田甲斐守様(秋月藩)・津輕右京亮様(津輕藩)・鍋島紀伊守様(小城藩)・鍋島主税様(蓮池藩)・細川若狭守様(熊本新田藩)、当時勤番仙石越前守(出石藩)・田村下総守(一関藩)・右之御方々様衆中申合、当勤番中帳面出来候事

一、此帳ニ記所者、只今迄御用箱之内ニ有之所々前々より御條目、度々被 仰渡候御壁書、其節之当番分書送り等之内撰之、後々可用書付、從 公義相渡候絵図面并印鑑類等記之候事

但、右之内前々被 仰渡候品ニ而茂當時難用ものハ除之、且亦年々伺品々被 仰渡候者一度分斗記之、余者除之

一、年号不知分者前江出シ、大概跡ニ而相知候分者考候而順々ニ書入

置候、并断書惣而後鑑二不成義者略之候事

右万治三子年頃ヨリ天和・貞享・元禄・宝永・正徳中、夫より享

保・元文頃より宝暦二至而記之事

向後此帳二可記大意 御條目并時々被 仰出之御壁書、且又度々

被 仰渡候品々之内後鑑二可留者撰記之、其外年々相定候被 仰

渡、其時切り之御断等、都而後鑑二不相成義者帳面二除之、張紙

二而可申送事

以上

宝暦八戊寅年九月

当番

仙石越前守内

土川治部右衛門

石原十右衛門

田村下総守内

矢内南波

平田藤右衛門

右より、以下のことが明らかである。

第一に、この置帳は、神田橋門番をひんばんに担当する一藩の実務者すなわち番頭と、江戸藩邸の責任者である留守居が申し合わせ、出石藩・一関藩が当番中の宝暦八（一七五八）年九月に作成を始めたものであった。各藩は、いずれも柳間詰であり、おそらく門番勤務に限らず、留守居同士の接点があったと考えられる。この基本台帳が、幕府の関与がなく、担当藩によって自律的に作成された点は、きわめて重要であろう。神田橋門がさかのぼって万治三（一六六〇）年から記述を開始しているのに対して、大手三門の場合、大手門の「置付帳」の「抄書」は宝永六（一七〇九）年十二月、内桜田門の「置付帳抜書」は元禄五（一六九二）年、西丸大手の「置付帳写」は元禄一五（一七〇二）年から記述が始まっ

ている⁶¹。大手門と内桜田門は抄録であり、またいずれも収録年代だが、遅くとも西丸大手門の置帳は、宝永四（一七〇七）年一〇月の小人目付からの問い合わせに対して「置帳」の記載をもとに口頭で回答していることから（置帳二有之候段口上二而申達候）、この時点で成立していることは確実である⁶²。このように、各門で成立年代や収録開始年代に、ばらつきがある点に注目したい。成立の背景には各門相互の影響もあったであろうが、幕府の指示によって一斉に、かつ同じ基準で作られたわけではない。

第二に、作成理由は、これまで「致駢候留帳」がなかったことである。幕府からの「御条目」や「壁書」、担当藩からの「書送」は、「御用箱」に収納されていたが、その「留帳」が必要になったのである。なぜ宝暦八年九月の段階で必要になったかは不明だが、文書の増大に伴って情報の整理・管理が必要になった可能性が高いだろう。最初の置帳の記載方針には、①万治三（一六六〇）年より直近まで、従来の御用箱の文書より後に用いる可能性のあるものを選んで記し、併せて幕府から渡された絵図面・印鑑を記す、②さらに以前の「被仰渡」で現在使われていないものは記載せず、伺いも例年のものは一度だけ記す、③「断書」もすべて後に参照しないもの（後鑑二不成義）は省略した、としていることから類推できる。そして、今後作成するものにおいても、幕府からの「御条目」、たびたびの「御壁書」や口頭での指示（仰渡候品々）は、後に参照するもののみ選んで記し、また年々の定や一時的な「断」など後に参照しないものは帳面に記さず、張紙で申し送ることとされている。情報の整理が必要だったのである。

ちなみに、内曲輪門の鍛冶橋門番の場合、延享三（一七四六）年七月に、二日後の番所修復に先だって、幕府の留守居へ伺いが出された⁶³。

一、七月九日御番所女通切手其外諸切手古キ分取払之儀伺書、御留守居御月番丹羽近江守様江以使者差出候処、勝手次第取捨仕候様

二御差図有之候二付、取払焼捨申候、伺書左之通

覚

鍛冶橋御番所此度御修復御座候、就夫右御門女通切手始其外諸切手共致袋入、御番所勝手天井へ不残釣置来候処、年々数多相成、天井も段々差塞り候、紙袋之事故、大切之御番所火之用心方々第一氣遣敷御座候、為念一兩年分ハ差残、前々々集有之候古切手之分ハ相納候様仕度候、此段宜御差図被成可被下候、以上

七月九日

当番 一柳土佐守

鍋嶋備前守

丹羽近江守殿

内藤越前守殿

瀧川播磨守殿

酒井越中守殿

土屋式部少輔殿

先述したように、鍛冶橋門では元禄一五（一七〇二）年の八戸藩勤番分の一四〇日間で門の通過にかかわる切手が約四五〇枚におよんでいる（前掲表5）。また宝永六（一七〇九）年五月二日より一〇月二日の八戸藩勤番中は、「諸通切手式壹百五拾五通」であった。⁶⁴門番所では、こうした切手を紙袋に入れて、番所勝手の天井に釣っていた。しかし、年月を経て天井が「差塞」る事態に至ったため、火事の原因にも成りかねないとして、保管は直近一・二年分のみとし、残る古切手を収納することを願ひ出たのである。月番留守居の回答は、古切手の「焼捨」であった。切手の例であり、番所の建替がきっかけであるが、さまざまな門番所の文書についても、文書量の増大という問題が発生していた可能性が高いだろう。

（2）置帳の内容と意義

置帳には、前述の神田橋門の例にみるように、壁書、度々の「仰渡」、年々の「定」、時限的な「断」から、今後の参照すべきこととして書き留めるもの（「後鑑ニ可留者」）が選択され、記載された。では、どのようなことがらが選択されたのであろうか。

西丸大手門の写本の冒頭には、一〇項目の分類のもと、重要な記事の目録が付されている。また内桜田門の抄書の大分類は八項目、大手門の抄書の分類は一六項目であった。表11には、それらのおおよその対応関係を示した。分類の差異は、写本を作成した各藩の担当者がそれぞれ項目を設定したことによるもので、大手門の方が門出入の対象が細分化され、西丸大手門・内桜田門で雑とされたものも分類されているが、重視された内容は同じである。主な内容は、門の開閉と通過者の改めや儀礼（2・5・8の一部）、將軍御成（1）、空間の管理（6・10）、祭礼（8）、災害（3）の対応といった基本的な職務と、その遂行にかかわる各門への伝達（9）となる。

また「大手御帳付筆記類集」では、記入の基準があげられている。

- 一、御番中差立候御断等、置付帳へ相記申候、古置付帳見合可申事
- 一、御小人目付参り出入御断之内、武器・兵具之類ハ置付帳へ相記
- 一、毎夜御番士衆より面番出役帳借、置付帳へ相記

寛政亥・子（寛政三・四（一七九二・九三）年）之御番中、面番

諸改帳日暮候上ハ御番頭中へ御番士衆より被差出候事相成候

こうして記録された情報は、実際に先例として利用された。たとえば、惇信院（家重）の二十七回忌を終えた天明七（一七八七）年六月、翌日に開かれる江戸城で増上寺方丈ほか出家中の労をねぎらうための饗応の対応について、小人目付より「天明三卯年廿三回御忌之心得ニ仕可然」との指示が神田橋門番にもたらされた。そこで、担当の宇土藩は以下の対応をとった。⁶⁵

(前略)置帳致吟味候得共都而御年回之節^者古之先例相見不申候二付、外桜田御門問合候処、是亦相知不申候二付、内桜田御門問合被申候処、是以不相知候段返事ニ申来候間、尚々置帳被致吟味候処、天明四辰年日光 御門主様一品ニ被為 任候御饗応・御能同年九月四日ニ有之、其節平日之通り勤番之旨相見候間、平日之通^二而も可有之哉、何れニも当御門同様相心得度由申来候、右ニ付大手^江問合候処、宝暦十三年閏六月廿四日御饗応之節、水野沓岐守様(若年寄) 五半時御登 城被成候、御番所平日之通致勤番候旨、旧記有之候二付、弥登城有之候共平日之通勤番之心得ニ候段申来候、是之^(ママ)当御門平日之通致勤番候、尤外桜田^江も右之趣申遣候、外々御門数カ所分問合申来候間、何方^江も平日之通り勤番之心得ニ御座候段申遣候、後年為御見合記置候、以上

六月廿四日

神田橋御門当番細川和泉守内

岡榮右衛門

小人目付は五年前の直近の先例に倣うように通達したが、神田橋門の置帳にはその先例がなく、同様の先例をすべて検索したが見つからなかった。そこで、宇土藩は外桜田門番に問い合わせた。外桜田門番も当初はわからず、内桜田門番に問い合わせたがやはり不明だったため、再度自身の置帳を確認したところ、四年前の日光門主の饗応の際の対応が通常勤務(「平日之通り勤番之旨」)だったので、通常勤務と思われるが、いずれにしろ神田橋門に合わせて対応すると回答してきた。そこで神田橋門では、念のため大手門番にも問い合わせ、同門番の「旧記」に記載された宝暦一三(一七六三)年の饗応の際の先例を得た上で、通常勤務と決定した。この経緯でうかがえるように、幕府(小人目付)は先例の日時を示すだけで、具体的な勤務内容は指示していない。幕府は、門番役が先例を蓄積していることを前提にしているのである。これは、結局神田橋門番にも他の門番から問い合わせが来ているように、すべての門で

表 11 「置帳」の内容分類

番号	西丸大手門	内桜田門	大手門
1	御成一件	御成一件	御成(一)
2	御門出入開閉御供連一件	御門出入并開閉一件	御門出入(二)、御三家・御三卿・御女中様方(十一)、公家衆御門跡(十二)、御供連下馬立御役人様方御上下(三)
3	火事地震一件	火事一件	火事(九)
4	御制法御目付御見廻一件	御制法一件	(雑)(十三)
5	御吉凶御出仕御能献上一件	御吉凶御出仕并献上一件	御吉事(七)、御凶事(八)
6	水死人浮物并御堀持場一件	浮物・病死一件、異変一件	道違紛者・放馬・犬入・浮物・捨物類(四)
7	忌服故障一件	忌服故障一件	(雑)(十六)
8	雑事一件	雑事一件	雑(十六)、御番所替(十)、日光(十三)、祭礼(十四)、外圍(十五)
9	諸品書入御門継一件		御門継(六)
10	御普請御破損松草鞆縄一件		御修復・草刈(五)

(西丸大手門は「西丸大手置帳写」(福井家文書)、内桜田門は「内桜田門置帳書抜」(同前)、大手門は「大手控」六(閑散文庫)より作成)

同様であった。そして、置帳(あるいは「旧記」)を参照して各門番は連携をとり、同じ対応をとった。神田橋門番では、置帳を作成し始めてから三〇年を経過していたにもかかわらず、記録がなかったため、各門番に問い合わせ、その結果を後年のために記録したのである(「後年為御見合記置候」)。

記録に際しては、書式の規定が設けられていた。たとえば、庄内藩の

大手門番のマニユアル「大手扣」二では、以下の記述がある。

一、置付帳書法、二字下ケテ日付相認、上ケテ一打とし、其日一日夜中迄之事共不殘記申候、一打ハ何程茂いたし紙数二而相成候而も日付ハ記不申候而、又翌日茂右之通月付日付共ニ相認上二而一打とし、御門明より御門明迄之事記申候、日何日とハ認有之候、是者御並合茂相見候付、日御当番より改之

これは、夜番を行うため、一日の範囲を規定し、さらに一日分の表記方法を定めたものである。また、いわば書記として置帳を作成した「御帳付」役の四冊からなる手引書には、文字についての規定もあった。⁽⁶⁶⁾

一、御請書にて御当番御目付中様卜認、置付帳其外諸文通ニハ様ノ

字認 (字体)

このほか、四冊のうち一冊は「置付帳認方」にあてられ、定期的な行事の記載(内代、正月三ヶ日ほか)や御成、通行者の連絡などさまざまなケースについて記述方法が詳細に示されている。⁽⁶⁷⁾「御帳付」役の者にとつて、置帳の記述が重要であったことがうかがわれる。そして、「但此文言其節御断之模様ニ可寄事」とあえて注釈がつけられているものは一条しかなく、本来は均質な記述が追求されたと考えられる。門番役をつとめる大名の共有情報を作るため、表記方法の統一と均質な表記、すなわちそのフォーマット化が求められたのである。

また、記載にみる幕府との関係も注目される。置帳には、さきに見たように職務に関して先例として重要と判断されたものが記載されるが、その際に留意されているのが幕府役人とのやりとりの記録であった。とくに重視したいのは、門番を管轄する、当番目付(ないし徒目付)より小人目付(閉門後の大手門は百人組番所)によって伝えられる事前の告知(「断」・指示・問合と、門番からの承諾・回答、あるいは門番から逆のルートでの問合・届出と幕府役人からの回答が、どのように記録でされているかという点である。たとえば左は、「置付帳認方」の雛形の

一つである。

六十七 一、御堀船入御断

一、從御当番御目付様御小人目付白井安藏方を以、明何日今当御門左右今和田藏御門迄道橋石垣草取候付、御堀二船入御用相済次第船上ケ候御断被仰下之

石垣の草取りのために一時的に堀内に舟が入る際の事前連絡であるが、とくにこうした幕府役人からの指示や問い合わせに対する回答は、書付で渡されるよりも、「口上断」と口頭の場合が多かった。つまり、置帳では、勤務中の行為や書付の控とともに、こうした口頭の言葉を文章化して記録するという点も重要だったのである。表記方法の統一は、音声を文章化することにも起因しているといえよう。そして、こうした記録は、担当藩が後に参照するだけではなかった。

置帳には、幕府役人(目付と配下の徒士目付・小人目付)からの問合が散見する。たとえば、元文三(一七三八)年五月六日には、本丸御徒目付長谷部安五郎より西丸大手門に対して、西丸大手番所が本丸目付持か西丸目付持か問い合わせがあった。⁽⁶⁸⁾担当藩は、現在まで西丸持といわれたことがなく、両丸目付に届けてきたと回答した。すると、再度「享保十巳年二西丸江御移徒有之候御被 仰出者無之候哉、其節六七月頃之内留再度繰出相知候て、其段申達候様ニ」と命じて帰った。担当藩では、置帳を検索したが、何の記載もなく、その結果を報告している(「右年中置付帳致吟味候得共、何之被仰渡茂相見へ不申候」「相見へ不申候段申上」。幕府役人の側でも何らかの記録があったと思われるが、番所の支配管轄という重要な規定がはっきりしないほど、その情報の蓄積は不十分であり、結局門番所の置帳の記載に頼っていたのであった。さきにみた饗応の対応に関する小人目付の指示も、じつは幕府側に詳細な内容が記録されていなかった可能性が高いだろう。

(3) 置帳の展開

こうして記述がすすめられていった置帳であつたが、年を重ねるにしたがつて膨大な量が蓄積されることとなった。大手門番の場合、基本的には一年の記述で一冊が作成された。⁽⁶⁹⁾こうした冊数の増大は、管理に支障をきたした。内桜田門番では、寛政一二(一八〇〇)年七月に欠本が多数確認されている。⁽⁷⁰⁾

一、当御門番被 仰付候間、御番所請取、置帳相改候処、左之通不相見候付、御先番青山大膳亮様衆^江及掛合候処、以前より無之旨、御先番様申送有之候段申来候付、為見合記置候

戸田能登守

当番中

井上河内守

さらに、文政元(一八一八)年二月には、置帳の冊数がはつきりしないため、大番所の修復をきっかけとして確認と整理が行われている。

一、当御門置付帳前々々両番^ニ而長持式棹差出入念候処、追々嵩ミ、御尋筋等有之候節調方不便利ニ付、此度大修復後両番申合、御鍵番詰所板羽目之場所^江新規帳棚補理、当用之分迄年号改積置候、平日内抜有之、虫等も無之様永久見張付、御門交代等之節数相改受取渡、無怠慢候様申合候

但、当御門 通御 御立寄御用意等之節、如何相心得可申哉、御小人目付^江問合候処、萩原又六申聞候^者、御門付御帳面之儀ニ付其俣差置不苦候旨、御答申越、御番継申送候様、是又又六申聞候

秋元左衛門佐

当番中

本多中務大輔

内桜田門では、長持二棹に収納していた置帳が増大し(「追々嵩ミ」)、幕府役人からの問い合わせに対応するのが困難になったため、大番所の修復後、新たに帳棚を作り、現在使用している冊まで年号を確認して収

納することとした。また、虫がつかないよう、日々出し入れして確認するとしている。また出入関係にあつた小人目付に、將軍の御成の対応の際に支障がないかも確認している。実際の収納にあたつては、置帳の冊数がはつきりしないため、現存しているものに年号をつけて確認し、欠本をリストアップしている。

一、御番所置帳員数不分明付、此度大御番所御修復後両番申合取調、以前之姿^ニ倣^ニ而一年号張出、員数相改委細記置候、向後猶又穿鑿之上、間違等も有之候ハ、御改可被下候事

文政元寅五月

秋元左衛門佐

当番中

本多中務大輔

こうした冊数の増大とともに、情報の過多も問題となった。そのため、記載対象の削減が行われている。左は文政三(一八二〇)年一〇月二九日の内桜田門番の延岡藩勤番中の例である。

一、明和五子年正月十五日青山下野守様・松平伊賀守様御勤番中両番申合、火事注進御徒目付当番所^江申候始末置付帳^ニ認候義、向後相除可申旨相見候処、近頃御注進之度毎又候認候様ニ相成、累年之事故置付帳相嵩候^ニ付、此度明和度申合候通、出火^ニ付御老中様方御 登城有之歟、何ぞ訳^ニ而も有之節相記、下通り之火事太鼓火氣之有無消鐘御届之分手前控帳斗記置、置付帳^江者相除候様、松平遠江守(尼崎藩)様衆申合候

一、煙立御断之義ハ当用番外御口上断帳^江記置、追々断返之節朱書書、不用帳^江相除候事^ニ候得^者、是又置付帳から相除可申候

一、杖御用之御方様御断杖帳^江記、永久相用候事^ニ付、右同様可致候

右式ヶ条も年久敷置付相嵩候節^者殊之外重ク相成候間、此度両番申

合向後置付帳^江者相除可申旨相立候

内藤備後守 当番中

明和五（一七六八）年の篠山藩と宮津藩の勤番中、幕府の徒目付番所への出火の連絡（火事注進）は今後置帳に記載しないこととしたが、いつしか毎回記載されるようになり、年を重ねて置帳の分量が高んでしまった。このため、今後は老中の登城など特別な事柄があった時以外は記載しない旨を、再度申し合わせている。同様の理由で、煙立の断（火を用いて煙が立つことの事前の知らせ）や杖の使用の断りは、他の帳面に記載し、置帳には記載しないこととしたのである。同様の事態は、大手門番でも確認できる。⁽⁷⁾

一、右置付庵帳之内風呂敷包之類之口上断、御目付中様分御小人目付を以被仰出候大御番頭中刻限之御断、火事御注進番之節火氣不見候火事覚等之類、天明二年寅十月十日分相改り、置付帳へハ相記不申事、右^者御番頭中御小人目付橋本佐次郎方へ御相談之上、御除二相成候

天明二（一七八二）年一〇月に、出入の小人目付に相談のうえ、いくつかの断や覚を記載から除外している。理由は明記されていないが、おそらく帳面の情報過多と分量増加への対応であろう。

図 6 には、神田橋門番の置帳の月ごとの丁数を示した。⁽⁷⁾ 毎月起こる事態は変わるため、あくまでおおまかな傾向しか確認できないが、記載量が増加傾向にあることがうかがえる。こうした中で、三十三冊目は大幅に記載量を減らしている。これは、同冊冒頭の以下の申し合わせによるものであろう。

置帳面認方之儀、忝番之置帳ニ記有之趣意^者、年々相定り候被 仰渡・其時切之御断等、都^而後鑑不相成儀^者相除、張紙ニ^而可申送旨有之候処、近年御請書控帳ニ認候儀迄^茂有之候間、此節相番申合、先例有之勤方・年々相定取斗方等委敷儀^者前年ニ相談、頭書斗認置申

候、依之近例之認方分荒増ニ付御不審^茂可有之哉、此段記置申候

享和三亥年四月

中川修理太夫内

草刈孫兵衛

鈴木雄左衛門

九鬼和泉守内

吉田右内

天野直次郎

当番の岡藩・三田藩は、「近年」は他帳に記載があるものについても記述があることから、置帳の作成開始の取り決めに立ち戻って、記述対象をよく選択することを申し合わせたのである。この冒頭の申し合わせによって、実際にこの冊の記述の削減が実現したと考えられる。しかし、増加傾向は変わらなかった。四十八冊目（文政元（一八一八）年六月）の冒頭にも以下の記述がある。

一、置帳面認方之儀者、忝番之帳ニ記有之候通、後鑑ニ不相成儀者相除、張紙ニ^而可申退旨之処、近年御請書御帳ニ認候儀ニ^而も記有之候ニ付申合、成丈断書斗ニ相認可申由、三十三番置帳初二相見候得共、其後又々混雑も相見得候間、此節尚又申談、後鑑ニ不相成儀者省之候事

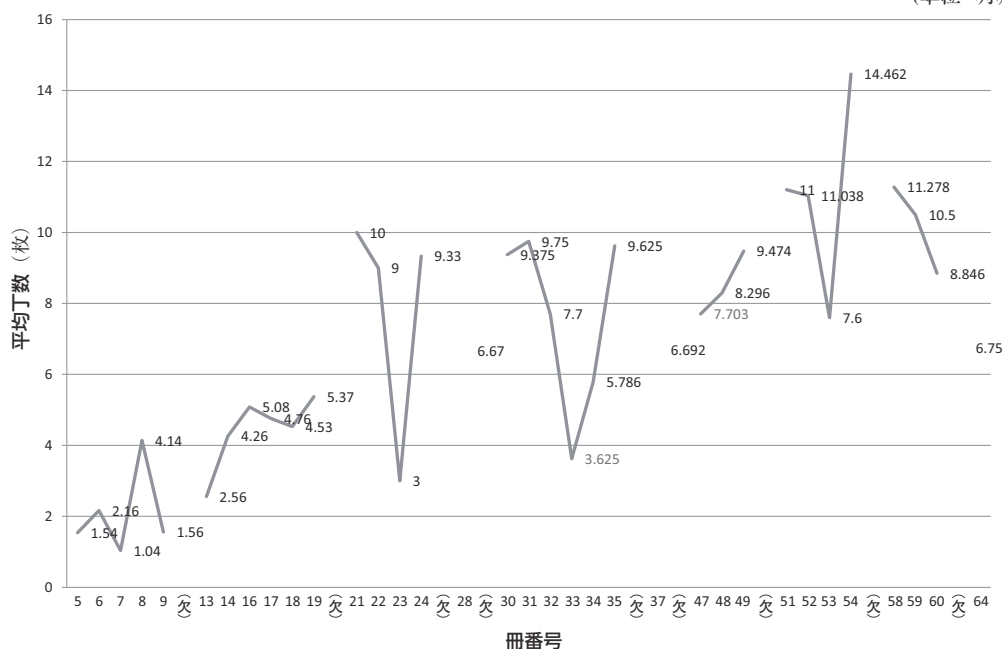
一、出火ニ^而御人数指出候得者記有之候得共、見合ニも難成儀ニ付、以来者除之間、万一御番所近所にて取片付候程之出火者後年見合ニも可相成候間、記之可然与申談候事

右之趣、年々置帳仕立候砌、表紙之裏ニ張置可申之相談候事いったん記載の厳選を申し合わせながら、再度具体的に削減内容を確認している。このように、置帳の記載増加は各門番所で問題となっていたのである。

記載の基準がありながら、後の参照にならない情報が書き込まれていくのは何故であろうか。表 12 は、文政六（一八二三）年に神田橋門番を

図6 神田橋門番置帳(国立歴史民俗博物館蔵)の月平均丁数の変化

(単位:月)



勤めた平戸藩の担当者の日記のうち一〇日間の勤務分の記載と置帳の記述を比較したものである。日記の記事は詳細にわたるが、置帳に記載されたのは、御成・玄猪といった儀礼の記事二件のみであった。門の開閉および廻り場の見廻りで異常がないという文言、藩内での交代(小代)や諸連絡といった記述は当然省略された。このほか、近隣の門番から廻状でもたらされる情報も神田橋門番の管轄ではないことから、除外されたのであろう。さらに平戸藩は、神田橋門番にかかわる事象のうち、門番の交代など定例化したものの、毎日の通過者の記録、目付への修復願と見分、煙立の断について、置帳に記載していない。一方、同じ置帳の翌年六月には、久居藩・出石藩が車両や材木通行の切手や煙立の連絡を記載している。置帳に記載する情報はかなり厳選されたが、実際には各担当藩の判断の差異があったのである。これが情報過多の一因と考えられよう。

置帳の記述の基準も、必ずしも徹底しなかった。左は大手門番の例である。

一、置付帳時刻認方、通例一時を三ツ二割、譬ハ五時打候得ハ辰上刻、五半時打候得ハ辰中刻、五半時過今四時前迄を辰下刻と記相見候得共、此方ニ而者御城之御例ニ準、一時を二ツ二割、明六半時打候得ハ辰上刻、五時打候得ハ辰下刻と記申候、中刻ハ無之候、十二時右ニ準記申候、安永六西御番中御小人目付橋本佐次郎へ承紀候上、改之

寅八月呉服橋御門毛利和泉守様御番頭廻状此方同様相見申候
庄内藩では、時刻の表記の二分法・三分法について、出入の小人目付に確認のうえ、置帳の記載を国元の城に倣った自家の基準(「此方ニ而者」)の二分法から三分法に変更している。⁽²³⁾ 呉服橋門番の長府藩からの廻状を同様の表記としていることから、他の門についても双方の表記が混在していたことがうかがえる。

表 12 藩の勤務日記と置帳(文政 6(1823)年 神田橋門番)

日付	日記の記載事項(○は置帳で確認できるもの)
9/27	<ul style="list-style-type: none"> ・門番の交代の手続き, 出番者の一覧, 藩邸への報告, 相番からの「申送」の控(城内普請で材木を積んだ船の通過があること等)。 ・小人目付より, 西丸留守居などの人事異動の沙汰。 ・小人目付より 29 日に「公方様・内府様」駒場野御成の沙汰。 ・当の門橋ほか破損数カ所を 8 日の御成前までに修復してくれたとして, 幕府大工棟梁ほかに礼金(文化 12 年 2 月の先例も引用)。 ・内桜田門番より, 29 日は早朝より詰める予定であることが廻状で伝達。 ・外桜田門番より廻状で連絡。小人目付より新大橋かけ直して西広小路で煙立の断があり, 回答書を出すよう, 指示あり。 ・幕府小普請方等の通行車両 3 件・一橋家の白 1 件・不浄籠 1 件の一覧, ほか諸切手・夜中女切手の通行者(詳細不明)。 ・持場内は別状なし。
9/28	<ul style="list-style-type: none"> ・開門・閉門で異常なし。 ・徒士目付への届書を松掛小人目付へ渡す(持場内土居上の並木松別状なき旨)。 ・小人目付より勘定奉行などの人事の連絡。 ・当番目付より, 両国橋普請中に煙立の断があり, 回答書を出すよう, 指示があり, 廻状で「組合御門十五カ所」へ連絡。 ・相番その他より 29 日の御成の連絡。 ・外桜田門番より廻状, 小人目付より伝えられた目付の 29 日に関する断(道取締のため, 明日は御用以外の車は止めること)。 ・西丸大手門番・外桜田門番より, 29 日は五つ頃出発の旨, 廻状。 ・外桜田門番より廻状。目付の指示で, 持場土手上の松の植え替えと折枝に取りかかる旨。 ・馬場先門・竹橋門より廻状。目付の指示で, 裏門・番所食違ほか修復終了につき, 渡されていた札を返納した旨。 ・馬場先門より廻状。西丸目付より 29 日の御成で「先格」の通りつとめること。 ・通過車両 5 両・荷物 3 件, ほか諸切手・夜中女切手などの通過あり(詳細不明)。 ・持場内は別状なし。
9/29	<ul style="list-style-type: none"> ・開門・閉門で異常なし。 ○御成の勤め。 ・藩内で番人の一部交代(「小代」)。 ・西丸大手門番, 和田蔵門番より, 目付からの御成の指示の連絡。 ・通過車両 2 件・荷物 1 件, ほか諸切手・夜中女切手などの通過あり(詳細不明)。 ・持場内は別状なし。
9/30	<ul style="list-style-type: none"> ・開門・閉門で異常なし。 ・作事方に, 大門東の方潜の貫木押鉄物に変形したので見分の上修理してほしい旨, 届。 ・小普請方に, 下陣井戸水切れにつき, 見分願を届。すぐに見分のうえ手入れあり。 ・藩邸より, 明朝藩主が門を通過する旨, 連絡。 ・目付の指示で, 裏門・番所食違ほか修復終了につき, 渡されていた札を返納。組合 15 カ所に廻状で, 相番・藩邸に手紙で連絡。 ・一橋門番からも同内容の件が廻状で伝えられる。 ・日比谷門番, 内桜田門番よりそれぞれ 29 日の御成の番を勤めた旨廻状。 ・外桜田門番より廻状。目付から両国橋掛け直して両広小路に湯小屋を修理するため, 煙立がある旨。 ・小人目付より, 来月御用番の順が伝えられる。 ・通過車両 4 件・荷物 2 件, ほか諸切手・夜中女切手などの通過あり(詳細不明)。 ・持場内は別状なし。
10/1	<ul style="list-style-type: none"> ・開門・閉門で異常なし。 ・藩邸の同役に「昨日之書上」と手紙を届ける。 ・藩内で番人の一部交代(「小代」)。 ・内桜田門番より廻状, 29 日の御成で藩主は体調不良で番所に詰めなかった旨。 ・呉服橋門番・鍛冶橋門番・日比谷門番より, 裏門・番所食違ほか修復終了につき, 目付の指示で, 渡されていた札を返納。 ・組合 15 カ所に廻状で, 相番・藩邸に手紙で連絡。 ・通過車両 4 件・荷物 2 件, ほか諸切手・夜中女切手などの通過あり(詳細不明)。 ・持場内は別状なし。
10/2	<ul style="list-style-type: none"> ・開門・閉門で異常なし。 ・昨日は藩主の対客で人手不足だったため, 本日藩内で番人の一部交代(「小代」)。 ・「昨日之書上」を藩邸に交代者が持参。 ・目付より, 大川橋の修理終了につき湯小屋撤収, 以後煙立はない旨, 廻状で組合 15 カ所に連絡。 ・常盤橋門番より廻状。裏門・番所食違ほか修復終了につき, 目付の指示で, 渡されていた札を返納の旨。 ・暁七時に藩主が対客のため出宅で門を通過する旨, 手紙で連絡。 ・通過車両 4 件, ほか諸切手・夜中女切手などの通過あり(詳細不明)。 ・持場内は別状なし。
10/3	<ul style="list-style-type: none"> ・開門・閉門で異常なし。 ・藩邸の同役に「昨日之書上」と手紙を届ける。 ・通過車両 2 件, 荷物 2 件, ほか諸切手・夜中女切手などの通過あり(詳細不明)。 ・持場内は別状なし。

日付	日記の記載事項 (○は置帳で確認できるもの)
10/4	・開門・閉門で異常なし。 ・藩邸の同役に「昨日之書上」と手紙を届ける。 ・藩内で番人の一部交代(「小代」)。 ・幕府の作事棟梁が、対面所御座敷・外張番所小屋取り立ての見分。 ・作事方改役が大門東の潜貫木押鉄物の見分に来る。 ○玄猪につき、勤め。 ・臨時に門下婦人改めのため、日雇入。 ・外桜田門番より廻状、目付から大川橋の修理終了につき湯小屋撤収、以後煙立はない旨。 ・通過車両2件、荷物3件、ほか諸切手・夜中女切手などの通過あり(詳細不明)。 ・持場内は別状なし。
10/5	・開門・閉門で異常なし。 ・藩邸の同役に「昨日之書上」と手紙を届ける。 ・藩内で番人の一部交代(「小代」)の日だったが、あと一日なので交代せず。 ・通過車両2件、荷物3件、ほか諸切手・夜中女切手などの通過あり(詳細不明)。 ・持場内は別状なし。
10/6	・開門・閉門で異常なし。 ・藩邸の同役に「昨日之書上」と手紙を届ける。 ・藩内で番人の一部交代(「小代」)の日だったが、あと一日なので交代せず。 ・相番より明朝交代の旨、連絡。自身の退番を組合15カ所に廻状で知らせる。一橋両屋敷へ連絡。 ・作事方改役より、大門統堀控杭・冠木御門統堀控杭ほか見分済。 ・通過車両1件、荷物2件。 ・持場内は別状なし。
10/7	・番所の交代。

平戸藩の「神田橋御勤番中日記 二」と「神田橋御門御用留置帳 五十三番」より作成
(ともに国立歴史民俗博物館蔵)

こうした情報の増加に伴い、検索機能も必要となってくる。内桜田門の場合、「置帳呼出目録帳」二四冊(表10-8)が置付文書の中に存在している。時期は不明だが、検索のための文書が共有のものとして作成されたのである。各藩の担当者は抜書を作成し、さらにその写本が関係者に流布した。次に掲げたのは、館林藩士福井家の「内桜田門置付帳書抜」全二八冊の作成経緯である。

内桜田御門必用書目

- 一、諸絵図 一冊
- 一、諸絵図御書付 一冊
- 一、御書付御定書御口上断 一冊
- 一、元禄五壬申年九月廿六日より安永十辛丑年閏五月廿六日迄 凡九十年置付帳書抜八冊 右丹波篠山青山下野守様藩中二木又右衛門正業書拔秘蔵之品、安中左近・中野弥一兵衛借用写之
- 一、天明元辛酉年閏五月廿八日より寛政七乙卯年六月十一日迄 凡十五年置付帳書抜 四冊 右著先役安中左近忠善書拔也、文政十一年大沼角右衛門目録を補助
- 一、寛政七乙卯年六月十二日より文化十三丙子年十二月十八日迄 凡廿二年置付帳書抜 四冊
- 右大沼角右衛門忠賢一手調浄書助筆

通計百二十五年連綿たり、此十九冊之末追々書継希而已 戊子(文政十一年)三月 大沼角右衛門忠賢

一は関係絵図の写、二・三は書付・定書・口上断録で、四より廿三までが年月日順の抜粋である。まず元禄五(一六九二)年より九〇年分の八冊(四〇十一)は、篠山藩士二木が「書抜」いた「秘蔵之品」を館林藩(當時は山形藩)の番頭大沼の前任(「先役」)の安中・中野が借用して写したものである。さらに安中は、天明元(一七八二)年より一五年分の四冊(十二〜十五)を作成し、最終の冊(十五)に中野が「此拾五冊八内

桜田御門勤番之為長者重宝の書なり」としている。そして、大沼がその後二年間分を引き継いで独力で書き抜きの上、同藩士の浄書によって四冊（十六〜十九）を作成し、さらに十二〜十五の目録も補っている。そして「百二十五年連綿」として作成された一九冊の続きの作成を読み手に託している。その後、この抜書は天保八（一八三七）年まで三人の手で六冊が作成されている。⁽⁷⁵⁾

さらに、実際の運用にあたっては、前稿で検討した内分のマニュアル「御番所余時向鏡咄連」も成立することとなった。同史料は、掃除さえ行っていれば門番を念入りに行っていると見られるという「御門作法之事」からはじまり、幕府に届け出ない内済の判断などが記載された、まさに内分での処理のマニュアルである。同史料は半蔵門番をつとめた小諸藩牧野家の家臣の文書群の中に残された写本で、「御門番所心得之覚」二八条と、「御番所動方心得書」二七条からなる。とくに前者は、麻生藩士森本家が享和三（一八〇三）年の作成した写本「所々御門取計控」にも収められており、作成者や作成目的は不明であるが、ひろく各藩の担当役人の間で受用されていたと考えられる。

おわりに

本稿では、江戸藩の常盤橋門番を中心に内曲輪門の機能を検討し、町人地と接する都市の番としての性格や、夜間の通行の制限、儀礼における武家の秩序の確認など、その意義を明らかにした。その上で、大手三門も含め、頻繁な交代の中でこうした機能を果たす基盤となった文書管理を検討した。

とくに注目したのは、門番役の引き継ぎの際に利用された「申送」「申合」、基本台帳としての置帳が、担当藩によって作成され、幕府の関与はみられない点である。門番役について幕府は基本法を作成したうえ

で、その都度指示を与えたが、その運用は各藩に依存していた。そして、幕府からの問い合わせを見る限り、幕府では指示や判断についての記録は不十分で、先例の蓄積も担当藩に依存していたと思われる。

また、同じ格の門であっても、將軍の御成のルートの違いや、周辺社会との関係など、実際の運用にあたっては微細な差異があった。たとえば、宝永六（一七〇九）年一〇月に鍛冶橋門を江戸藩から受け取った麻田藩は、留守居が江戸藩留守居に書状で「日比谷と違候⁽⁷⁶⁾番所数多こまり申候、内証道具⁽⁷⁷⁾扨違可申と存候間、後刻下役人遣し可申候間、其元御役人衆被仰合被相伝候様ニ被仰達可被下候」と、慣習の伝授を依頼している。こうした結果、情報を共有するために上記の文書が作成されることになったと考えられる。

こうして担当藩によって作成された置帳を中心とする文書は、重要な意味を持った。そして、門番を勤める各大名家が先例を共有するために作成した置帳は、均質な情報の選択や記述が目指された。しかし、幕府が関与することなく、各大名家に作成が任されることにより、結果的には藩ごとの判断の違いや、藩によって記述にずれが生じることとなる。先述した情報過多や記述の問題は、その一例である。

さらに問題となったのは、前稿で明らかにした家ごとの判断「御家風」である。内曲輪門においては、登城時の下座の格式は、幕府役人以外の武家については「私の下座」によって対応が異なった。そしてついには、前稿で明らかにしたように、門番の重要な機能である通過者の判断ですら、差異が生じることとなった。

このように、江戸城の門番役は、各担当藩の自律性によって遂行され、担当藩の情報の共有によって一定度の規律を保ちつつ、家ごとの判断基準の差異もはらんだ形で運用されていたのであった。

なお、各門ごとの情報や判断の共有については、表12にみるように、廻状でひんぱんに行われている。この点については、隣接した数門で構

成される門番組合の検討が必要であるが、本稿では明らかにしえなかった。今後の課題としたい。⁽⁷⁹⁾

註

- (1) 拙稿「江戸城警衛と都市」『日本史研究』五八三、二〇一一年。以下前稿と略記。
- (2) 拙稿「江戸の治安維持と防備」『歴史と地理』六四〇、山川出版社、二〇一〇年。
- (3) 拙稿「境界としての江戸城大手三門―門番の職務と実態―」『東京大学史料編纂所研究紀要』二二、二〇一三年。
- (4) 大友一雄「幕府寺社奉行と文書管理」〔日本近世史料学研究〕、北海道大学図書刊行会、二〇〇〇年、同「幕府奏者番と情報管理」〔名著出版、二〇〇三年〕、同「江戸幕府と情報管理」〔臨川書店、二〇〇三年〕。
- (5) 長谷川成一「北方辺境藩研究序説」〔津軽藩の基礎的研究〕、国書刊行会、一九八四年、初出は一九七九年。
- (6) 平井誠二「江戸時代における年頭勤使の関東下向」『大倉山論集』第二三輯、一九八八年。
- (7) 「御目付所日記」〔八戸市立図書館蔵八戸南部家文書 以下同文書群を八戸南部家と略記〕。
- (8) 『静岡市史』近世（一九七九年）第三編第三章、『静岡県史』通史編3（一九九七年）第一編第四章、『静岡県史』通史編4（一九九七年）第一編第一章。
- (9) 寛永八（一六三二）年より宝永四（一七〇七）年、享保二（一七一八）年より文化三（一八〇五）年にかけていた。
- (10) 「相番之覚」・「常盤橋御門御勤向被仰合帳」（天保一三（一八四二）年四月八戸南部家）。
- (11) 「御番所被蒙仰候節御目付取計一件」（八戸南部家）の表記による。
- (12) 門番役の番人の請負については、市川寛明「江戸における人宿商人の家業構成について―米屋田中家を事例に―」〔『東京都江戸東京博物館研究報告』第八号、二〇〇二年〕を参照。後述するように、播磨屋は参勤交代の道中人足を本業とする者であった。
- (13) 「常盤橋御門勤方覚」（八戸市立図書館蔵遠山家文書 以下遠山家文書と略記）。
- (14) 前掲「常盤橋御門勤方覚」・「要鑑辨志年中行事」〔国文学研究資料館蔵〕。
- (15) 元禄一（一六九八）年に呉服橋より番所が移転し、享保四（一七一九）年に廃止された。
- (16) 職務については前掲「常盤橋御門勤方覚」に記載がある。大番所・渡槽・冠木門・瓦塀・橋・外張番所・枅形番所・渡槽下と瓦堀下の石垣は作事方、土手・石垣・

上水樋・鵜首竜頭欄干橋共に井戸道筋は普請方が管轄し、門番に指示した。五月・八月には、破損場所の定期的な見廻りをうけた（「常盤橋御門年中行事」遠山家文書）。

- (17) 前掲「常盤橋御門年中行事」。
- (18) 「常盤橋御門枅形内倒者一件」（八戸南部家）。
- (19) 「（御定書）」〔八戸市史編纂室蔵宗（糠塚）家文書〕。
- (20) いずれも「御番所当用」（八戸南部家）。木葉屋への捨子の養育依頼は「鍛冶橋御門勤方巨細留他」（八戸市立図書館八戸青年会旧蔵本 宝暦九年か）でも確認できる。
- (21) 「日比谷御門番御用留書」一（八戸市立図書館八戸青年会旧蔵本）。
- (22) 前掲「鍛冶橋御門勤方巨細留他」。前掲「御番所当用」では、「御門前居候壺屋と申町人」となっており、また町奉行所にも挨拶している。
- (23) 「呉服橋御門申送帳」（弘化二（一八四五）年以降作成 八戸南部家）。麻生藩士森本家が享和三（一八〇三）年に作成した写本「所々御門取計控」（森本家文書 同史料は今井修平氏のご教示による）でも、尾張屋に金一〇〇疋、髪結所二軒に三〇〇文ずつとなっている。
- (24) 将軍が香琳院（五月二〇日）・有徳院（六月二〇日）・澄明院（九月八日）・文恭院（一月晦日）・最樹院（二月二〇日）、前將軍家斉の参詣が、文恭院（二月二日）、最樹院（二月二日）ただし天候が悪く延期）、浄観院（二月二四日）であった。
- (25) 二月二七日、四月五日（前將軍家斉とも）、四月二四日、五月一七日である。
- (26) 将軍が、演御殿（五月二三日）六時半時通御のみ、七月四日六時半時前通御・七時半時還御・大川筋（六月二二日）六時半時通御・七時半時還御（一〇月二三日）六時過通御・還御申下刻過）の四日、前將軍家斉が真間筋（一〇月一九日六時・還御の時間不明・亀有筋（二月一九日六時過・七時半過）羅漢筋（二四年五月一日 不例で藩主は出ず）の三日であった。
- (27) 将軍が濱御庭（八月二二日）六時半時通御・七時半時還御）、前將軍家斉が品川筋（二月二八日）・田安外原の犬追物上覧（二月一日）であった。
- (28) 弘化二年二月「御両敬御同席様方并御懇意之御方伊呂波寄留帳」（八戸市史編纂室蔵及川（類家）家文書）。作成者の及川徳恒は、弘化三年一月に参勤の供を命じられ、四月に鍛冶橋門番番士を任命されている（八戸市立図書館蔵「九代勤功帳」）。おそらく、役が決定した後、直近の情報を写したのであろう。また、須藤（売市）家文書（八戸市史編纂室蔵）にも同様の史料「御両敬帳」が残されている。家斉の子徳川敬之助（寛政八（一七九六）年）や老中の在任期間などから、須藤六郎兵衛が寛政八年より常盤橋門番の番士をつとめた際に作成されたと考えられる。
- (29) 「江戸例書 全」一〇四（三五七頁）。

- (30) 前掲「日比谷御門番御用留書」一所収の「下座見證文之事」。
- (31) I 文政九(一八二六)年九月「常盤橋御門御番所下座并途中下座牒」(遠山家文書)、II 天保一三(一八四二)年四月、一四年五月「常盤橋御番所御勤中下座帳」(八戸市史編纂室蔵宗「糠塚」家文書)。
- (32) 寛政六(一七九四)年八月「幸橋御門御番所下座帳方」(遠山家文書)の場合も、「行儀直拍子木」の対象は同様で、白州下座も御三家・御三卿の正室・後室と將軍の娘の記載がないものの、基本的には同様であった。本下座は三五家、半下座は留守居のほか二六家と二ヶ寺(うち一ヶ寺は藩の菩提寺金地院であるが、Iの下座帳との相違は時期による交際の変化や登城ルートの差と考えられる)。
- (33) 前掲「御両敬御同席様方并御懇意之御方伊呂波寄留帳」。
- (34) 前掲「御両敬帳」。
- (35) 『政談』、平凡社、二〇一一年、二二六頁。
- (36) 年不詳正月廿一日「口上(江戸城門番の下座帳にない松平肥前守を同帳に載せる)」(八戸南部家)。宣政の家督継承(宝永七(一七一〇)年)より長軌死去(正徳五(一七一五)年)の間に作成されたと推定される。内曲輪門のどの門の勤務時かは不明である。
- (37) 前掲「常盤橋御門年中行事」。
- (38) 前掲「常盤橋御門御勤向被仰合帳」。
- (39) 拙稿「江戸消防体制の構造」(『関東近世史研究』五八号、二〇〇五年)、同「江戸の消防体制と火事場見廻り」(『東京大学日本史学研究室紀要』別冊「近世社会史論叢」、二〇一三年)。
- (40) 前掲拙稿「境界としての江戸城大手三門―門番の職務と実態―」。
- (41) 前掲「鍛冶橋御門勤方巨細留他」。
- (42) 「大手控」三(鶴岡市立郷土資料室蔵閑散文庫 以下同文書群は閑散文庫と略記する)。このほか、「内桜田番所御勤番中覚書」(国文学研究資料館蔵館林藩秋元家臣福井家文書 以下福井家文書と略記)で、内桜田門・西丸大手門の「申送」も確認できる。
- (43) 前掲「鍛冶橋御門勤方巨細留他」。
- (44) 以下の記述は「大手控」一(閑散文庫)による。同史料には、「天明三年卯六月加賀山衛士・関茂大夫」(巻二)の記載がある。関は四〇〇石の庄内藩士で、九年前の安永二(一七七三)年に江戸城大手番頭を勤めており(『新編庄内人名辞典』、庄内人名辞典刊行会、一九八六年)。「大手御門置付帳抄」(後掲)の記事でも化政期に門番を代表して幕府の徒目付らに対応していることが確認できる。よって、おそらく勤務上の必要から作成したものであろう。
- (45) 「呉服橋御門申送帳」(八戸南部家)や、「文化六巳巳天保三辰迄 大手御番所申送頭書略抄」(閑散文庫)は、こうしたその都度の「申送」をまとめたもの、あるいはインデックスと思われる。
- (46) 文書の内容は、「御定目箱一通り之覚」・「御番所当用」(ともに八戸南部家)の記載による。ただし、前者の段階では、1〜4は「御多門之鍵 沓包」とともに「御定目箱」に収められていた。
- (47) 「神田橋御勤番中日記」(国立歴史民俗博物館蔵)。
- (48) 同年の八戸藩の退番時の記載に、引き渡し文書として「御勤番帳」の呼称が見えず、「御定目并置牒等御幕箱^江入一之間休息所ニ差置候」、あるいは「置帳・御道具帳」とあることによる(前掲「鍛冶橋御門勤方巨細留他」)。
- (49) 前掲「日比谷御門番御用留書」三。
- (50) 前掲「大手控」一。適宜、庄内藩が退番する際の記事(「大手控」三(閑散文庫)も参照して補った)。
- (51) 文化二二年の引き渡しの目録では、「御口上□□三冊 内不用之分巻冊」、「諸品積御供連帳 五冊 外御帳□巻冊 御書付□□」、「同 式冊 外御書付巻通」が追加され、八棒と別におそらく現用分である「置付帳 式冊」ほか鑑札が「五拾七枚」となっているが、基本的な項目は変わっていない(「大手控」三)。
- (52) 「置付帳」・「置帳面」などの呼称があるが、本稿では「置帳」で表記を統一する。
- (53) 西丸大手門では、享保九(一七二四)年六月一日に、徒目付が番所に火事地震帳をもたらし、帳箱に保管されることとなった(「火事地震之節御通帳一冊持参、是^者先達^而御渡被成候御通帳之内二重被成御方も可有之候得共、追^而御引替有之迄、此帳も用候様被申聞、且亦左之通書付ヲ以御断ニ付、写候^而御帳箱^江入置申候」。「西丸大手置帳写」四)。
- (54) 詳細は前稿参照。
- (55) 前稿では、この項目を誤読し、天明八年に大手門の置付帳が成立したと述べたが、このように訂正したい。
- (56) 「大手御帳付筆記類集」一(閑散文庫)によれば、切手は番所で管理し、毎月末に当番が幕府の徒目付に納めるものであった(「毎月晦日廿九日御大工頭御切手一ヶ月溜候^而当御番之分不残取集、御徒目付当番所へ相納申候」)。
- (57) 前掲「大手御帳付筆記類集」一。「大手控」一にもほぼ同文が掲載されている。
- (58) 「大手控」三。西丸大手門の「申送」の末尾も「一、此方様御当番中之儀委細置付帳ニ記置候間、御覧可被下候」、内桜田門の「申送」の末尾にもほぼ同文の「二、此方様御勤番中之儀委細置付帳ニ記置候、御一覽可被下候」とある(「内桜田番所御勤番中覚書」福井家文書)。
- (59) 外桜田門については後掲史料(国立歴史民俗博物館蔵「神田橋御門御用留置帳写」天明七(一七八七)年六月三日条)、幸橋門は前掲「鍛冶橋御門勤方巨細留他」の記載(「幸橋御門置帳抜書」)による。
- (60) 原形態のまま作成された写本である。管見の限り、平戸藩もしくは同藩の担

当者の写本が三九冊（国立歴史民俗博物館蔵「神田橋御門御用留置帳写」一、九、一三、一四、一六、一九、二一、二四、二八、三〇、三四、三六、三七、四七、四九、五一、五四、五八、六一、六四、小城藩の写本九冊（佐賀大学付属図書館蔵小城鍋島家文書「神田橋御門御用留置帳」宝暦九（一七五九）寛政六（一七九四）年）が現存している。

- (61) 「大手控」六（閑散文庫）、「内桜田御番記録 諸雑集」、「西丸大手置帳写」（福井家文書）。

- (62) 前掲「西丸大手置帳写」一。「玄猪」大納言様御本丸^江御成之節、西御丸大手御成被遊候哉」という問い合わせに対する回答である。なお、「西丸大手置帳写」では省略するときは朱で注記を入れ、文書が欠損している場合は朱書きで破れた部分を表現して「此処紙切有之候」と記すなど、原本の内容をできるだけ忠実に筆写したと考えられる。そして、同じ館林藩家老福井家文書に残されている「内桜田門置帳書抜」に対して、「西丸大手置帳写」は一冊目から記載日に間隔がないこと、神田橋門のような過去の情報の選択・編集ではなく、一冊目から同時に置帳の作成が始められていた可能性が高い。さらに、一冊目冒頭の元禄五（一六九二）年八月一日に「一、此日分帳面欠見得」と欠損が示されており、この月には置帳が作成されていたと推測される。

- (63) 前掲「御番所当用」（八戸南部家）。

- (64) 「鍛冶橋門番関係資料」（八戸南部家）。

- (65) 前掲「神田橋御門御用留置帳」一四。

- (66) 嘉永元年写「大手御帳付筆記類集」三（閑散文庫）。

- (67) 前掲嘉永元年写「大手御帳付筆記類集」三。

- (68) 「西丸大手置付帳写」七。

- (69) 前掲嘉永元年写「大手御帳付筆記類集」三。

- (70) 以下の一連の内桜田門の記述は、前掲「内桜田御番記録 諸雑集」による。この時の欠本は、「享保六年十一月廿日以前、七年十一月九日、八年七月十七日迄、十年五月二日、十一月晦日迄、十二年五月晦日、十三年九月廿五日迄、十四年五月廿七日、六月十七日迄、同年九月廿九日、六月十四日迄、十六年正月、四月、改元宝永（ママ）九月廿日迄」、「宝永元年九月廿日、同八年五月、改元正徳五月廿四日迄」、「享保」八年六月朔日より七月十四日迄、九年正月朔日、三月十八日迄、十年三月十九日、十一月、三月廿一日迄、「寛保」二年二月十七日、五月十七日迄、「寛延」二年正月朔日、六月十二日迄、四年十一月、改元宝暦十一月朔日、十二月晦日迄、「寛政」四年七月廿三日、十二月晦日迄、五年十一月十五日、十二月晦日迄、六年十二月朔日、晦日迄」であった。

- (71) 「大手御帳付筆記類集」一（閑散文庫）。

- (72) 前述の通り、神田橋門番の置帳は宝暦八年九月から編纂され、沓番から三番（八

年一月）のほぼ全冊が過去のものの編集で、四番は絵図面・書付の改め、規式御成・「御見通」御成などの御成、年間の定例行事での勤め方といった基本的なものが一〇年まで収められている。このため、五番以降についてデータを作成した。

- (73) 「大手扣」二（閑散文庫）所収「御番中御作法并御番士以下勤方之事」。問い合わせをした小人目付橋本佐次郎は、「大手扣」五（閑散文庫）で「御出入御小人目付橋本佐次郎」として登場する。

- (74) 文政一三（一八三〇）八月一日の刀傷沙汰の一件による（『藤岡屋日記』第一巻、三一書房、四四八～四五一頁）。

- (75) 十九は天保四年三月に松野幸右衛門が増補し、廿は大沼が文政一二年四月に西丸大手勤番中に作成、廿沓は天保三年一月、廿二は同年八月に村杉伴右衛門直能、廿三は同四年六月に松野、廿四は同年七月に大沢録之進師和、廿五は松野が作成し、捺印している。

- (76) 前掲「所々御門取計控」。

- (77) 前掲「鍛冶橋門番関係資料」。

- (78) たとえば、16常盤橋門の組合は24日比谷門・23外桜田門・17神田橋門・15呉服橋門・26和田倉門・25馬場先門・18一橋門（御番所当用）、14鍛冶橋門の組合は24日比谷門・23外桜田門・17神田橋門・16常盤橋門・15呉服橋門・26和田倉門・25馬場先門・10幸橋門・13数寄屋橋門・11山下門（前掲「鍛冶橋御門勤方巨細留他」）であった。成立の契機などは不明である。

【付記】 脱稿後、第一章については、本稿をもとに「江戸城門番役」（『八戸市史』通史編Ⅱ近世、二〇一三年）を執筆した。

（国立歴史民俗博物館研究部 現 学習院女子大学国際文化交流学部）
（二〇一三年二月一三日受付、二〇一三年五月二四日審査終了）

Function and Information Management of Edo Castle Gatekeepers

IWABUCHI Reiji

This paper reveals the following two points regarding Edo Castle gatekeepers by investigating the inner gates and major three gates, whose guard duties were assigned to daimyo (feudal lords).

Firstly, the paper examines the function of Edo Castle gatekeepers, which has not been deeply studied because of the argument that they substantially lost their function of defense in peaceful times without internal or external wars. This article probes into their function, centered on the inner gates that provided an interface between the castle enclosure and city space, with a case study of an individual domain (the Hachinohe domain). The results indicate that those gatekeepers obviously served as city guards in contact with townspeople on occasions such as management of the space, festivals, and pedestrians passing by at night, as well as functioned to control nighttime traffic, show courtesy, and confirm the order of samurai society.

Secondly, the paper investigates information management of the inner gates and major three gates as a basis for carrying out duties with frequent shift changes. Special attention should be paid to the fact that the domains on duty kept log books, not only Moushiokuri and Moushiawase used for shift changes of gatekeepers but also Oki-cho used as a basic ledger, without involvement of the shogunate government. Although the government created fundamental laws concerning gatekeepers and gave instructions as necessary, the operations and accumulation of practices depended on individual domains. As a result, private operations manuals were produced, and differences in judgments arose among respective gates and clans. In this way, the duties of Edo Castle gatekeepers were executed autonomously by each domain according to the judgment standards that varied depending on clans though based on certain disciplines kept by sharing information among the domains on duty. Although the study of document preparation and management of the shogunate organizations is in the stage of case accumulation, this study can illustrate a case under conditions different from those of conventional studies, where there were checkpoints whose keepers changed frequently.

Key words: Edo Castle gatekeepers, city guards, courtesy, information management, domain autonomy
